

京都芸術大学  
学科別カリキュラム評価  
自己点検・評価報告書

2025年7月  
文芸表現学科

## 目次

はじめに	1
基準 1 理念・目的	
基準 1-1 学科の「人材養成に関する目的」の設定と周知	4
基準 2 学生	
基準 2-1 学生の受け入れ	9
基準 2-2 学修支援	15
基準 2-3 キャリア支援	21
基準 2-4 学修環境の整備	27
基準 3 教育課程	
基準 3-1 単位認定	33
基準 3-2 教育課程	36
基準 3-3 教員・職員	55
基準 4 学修成果	
基準 4-1 在学中・卒業時	63
基準 4-2 卒業後	72
基準 5 内部質保証	
基準 5-1 内部質保証の機能性	76
おわりに	81

## ①大学及び学科の沿革

現在の京都芸術大学 芸術学部 文芸表現学科の前身である、京都造形芸術大学 芸術学部 芸術表現・アートプロデュース学科 クリエイティブ・ライティングコースは、文芸創作および編集を主たる専門領域とするコースとして2007年に設置された。当時の学科全体の入学定員は35人、コース主任は新元良一であった。

その後、2011年に芸術学部 文芸表現学科が設置された。新学科長には、芸術表現・アートプロデュース学科長であった編集者の門崎敬一が着任。入学定員は24人であった。

2014年には入学定員を35人に増員し、新学科長に同じく編集者の校條剛が就任した。2018年にはさらに入学定員を40人に増員し、新学科長に文学研究者の河田学が就任した。学部方針にしたがって、現在の「文芸と社会」にあたる社会実装科目を開講し、文芸表現の学びを活かした学生の活動または成果物を、学外に広く発信する取り組みを行った。

次の2020年は、コアカリキュラム化の学部方針に合わせ、必修コア科目「文芸表現入門Ⅰ・Ⅱ」「文芸表現ベーシックⅠ・Ⅱ」「文芸表現応用Ⅰ・Ⅱ」を1年次～3年次にかけて段階的に開講した。翌2021年には新学科長として作家の山田隆道が就任した。

さらに2024年には、主体的な学修のいっそうの充実を目指す本学の新カリキュラムに呼応し、学科のカリキュラムも全面的に刷新。また入学定員も45人に増員され、現在に至る。

## ②大学及び学科の現況

以上の歩みを経て、2025年現在の京都芸術大学 芸術学部 文芸表現学科 クリエイティブ・ライティングコースは、「読む・書く・編む・聞く・話す」の5つの側面から「ことばの表現」を追求するコースとして運営されている。

芸術大学に設置されている文芸表現学科ならではの「作品創作と社会への発表」を重視しており、在学生は小説（純文学、大衆文学、ライト文芸、ライトノベル）、戯曲・シナリオ、エッセイ、取材記事（アーティクル）、ノンフィクション、文芸批評、各種評論、詩、短歌・俳句といった、多様なジャンルの文芸作品の創作・執筆を、理論と実践をつうじて学ぶ。

また、創作・執筆と同時に「編集」を学ぶことも学科の大きな特色であり、複数人の協働による単行本や雑誌などの企画・取材・執筆・編集・制作・販売・販促、同じく複数人の協働による読書会やトークライブといった文芸イベントの企画・制作・広報・運営など、いわゆる社会実装的な活動も盛んに行っている。

卒業後の進路は小説家、ライター、編集者、新聞記者のほか、広告業界のコピーライターや、テレビ・ラジオ・映画・演劇・ゲームを横断する脚本家（シナリオライター）・放送作家などの「書く仕事、編む仕事」、あるいは書店員や図書館司書などの「本にかかわる仕事」、また一般

企業の広報職などの「伝える・発信する仕事」など実にさまざまで、いずれも「ことばの力」で社会を切り開き、社会を変革できる人材の輩出を目指している。

2025年現在、文芸表現学科には1年生～4年生まで計190人（1年52人、2年45人、3年51人、4年42人）の学生が在籍している。それに対して教員は常勤の専任教員が6人、非常勤教員（客員教授3人、非常勤講師27人）が30人、事務職員が2人である。

上記教員についての詳細は基準項目3-3「教員・職員」にて後述するが、プロの小説家や脚本家、放送作家、ライター、編集者、書評家、文学研究者、文芸評論家、詩人、歌人、俳人、ブックデザイナー、さらには「話しことば」のプロフェッショナルである元NHKアナウンサーや上方落語家など、芸術大学ならではの広範囲かつ個性豊かな実務家教員が多く、それぞれの専門領域での豊富な実務経験を活かして、学生の多様なニーズに応じた指導を行っている。

## 基準 1 理念・目的

### 本基準の趣旨

大学の目的や役割は、教育基本法において「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」と定められています。とくに私立大学については、建学の精神に基づき、個性や特色を活かした教育研究活動を行うことが期待され、人材の養成に関する目的、教育研究上の目的を、寄附行為や学則等に定めることが法令により定められています。

学校法人瓜生山学園は、寄附行為第 3 条に法人の目的を、「教育基本法及び学校教育法に従い、芸術立国の志によって世界の恒久平和に寄与し、これに資する人材の育成を目的とする」と定めています。1991 年に京都造形芸術大学（2020 年に京都芸術大学に名称を変更。以下、「本学」という。）を開設する際には、「芸術と哲学によって、新しい人間観、世界観の創造を目指す」ことを建学の理念と定め、目的を、「京都芸術大学は、教育基本法および学校教育法の定めるところに従い、学術の中心として広く知識を授けると共に深く芸術学、デザイン諸学、造形芸術に関する専門の学芸を教授研究し、芸術的感性豊かな社会人の育成を以って、我国芸術文化の復興と発展に寄与することを目的とする。」と学則第 1 条に決めました。また、本学の使命、教育目標を、次のとおり定めています。

### 大学の基本使命

芸術を学ぶ者たちが、来るべき文明の姿を思い描き、人類危機の時代を克服するという強い意志をどう身につけるか。そしてまた、他者の痛み想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう培うか。すなわち、良心をもって社会を変革する芸術家魂をどう育てるか。

芸術立国とは、芸術立国を担う人間の成長にほかならない。芸術文化を原動力とする文明への展望と、人類と自然への深い愛情に満ちた哲学を持った人間を輩出する。それこそが、本学の最も重要な使命である。

### 教育目標

人類が直面する困難な課題を克服するために、自らの「人間力」と「創造力」を鍛え、社会の変革を牽引することのできる人材を育成する。

各学科は、こうした本学の使命や目的、教育目標に基づき、学科毎の人材養成に関する目的を定め、教育課程の編成や実施に反映するとともに、使命・目的に基づき教育研究実施組織を編成し、計画的且つ組織的に教育目標を実現していくことが求められます。

## 基準項目 1-1 学科の「人材の養成に関する目的」の設定と周知

- ①大学の理念・教育目標との関連性
- ②個性・特色の明示、変化への対応

### (1) 1-1 の自己判定

基準項目 1-1 を満たしている。

### (2) 1-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①大学の理念・教育目標との関連性

文芸表現学科は、本学ウェブサイトの「建学の理念・使命・目的」【資料 1-1-1】に基づき、学科の「人材の養成に関する目的」を以下のとおり定め、同じく本学ウェブサイトの「学則別表 3」に明示・公表している。【資料 1-1-2】

#### 学科教育目標

「ことば」に関する実践的かつ理論的な学びをつうじて、人間と社会を常に俯瞰的かつ批評的に見つめ、新しい言語表現を追及する創造力と、異なる価値観をもった他者とのたゆまぬコミュニケーションと協働によって、文芸と社会をつないでいく人間力を身につけます。これら二つの力をもとに、ことばの力で社会を編み直し、社会に新しい価値を生み出すことのできる人材を育成します。

上記のなかでは、とくに「新しい言語表現を追及する創造力」と「文芸と社会をつないでいく人間力」の二つの力を涵養することを重視している。この二つの力を結集して、社会に新しい価値を生み出すことのできる、知見と逞しさに富んだ人材の輩出を目指している。これは本学の基本使命である「良心をもって社会を変革する芸術家魂」「藝術立国を担う人間の輩出」などに合致した文芸表現学科の基本使命でもある。

また、学科教育目標の資料【資料 1-1-3】でも詳述されているとおり、この二つの力をもとにするということは、旧来の作家（小説家・脚本家）、ライター、出版編集者といった、それぞれの文芸専門職の育成を目指すだけに留まらない。執筆者・創作者（表現者）自身が文芸作品の生成から受容までの仕組みを理解し、社会や市場を俯瞰的に見据え、そこに横たわるさまざまな社会課題を先見性と洞察力をもって発見・解決できる人材、それはすなわち、「文芸と読者」「文芸と社会」そのものをつなげていくためのさまざまな施策を自ら考えて実行できる、言わば「ライターとエディター」のマルチマインドを持った人材のことである。

#### ②個性・特色の明示、変化への対応

そんな学科教育目標は、文芸表現の専門領域にかかわる学問の進展状況と、文芸表現の産業構

造や市場状況の変化に対応すべく設定されており、これが学科の特色・個性となっている。

まず学問分野においては、近年は人文学の意義や重要性が合理性・論理性を求める現代社会で認知されにくくなっているが、より複雑化し、混迷を極める未来社会を見据えると、いわゆる実学だけでは解決できない課題が数多く予測される。人間の多様性やSDGsへの眼差し、人間や社会そのものについての考察は、人文学の知見がなければ応えられない。

文芸表現学科が教育目標として掲げているのは、そんな複雑化する社会において、人間と社会を常に俯瞰的かつ批評的に見つめ、そこに横たわるさまざまな問題を先見性と洞察力をもって発見し、解決に導ける人材の育成である。

また、以下の3領域を学科教育の主要ジャンルとして位置づけ、それぞれの産業構造や市場状況の変化に対応することを目指した結果、これもまた学科の個性・特色につながっている。

- ・小説の研究・創作～小説家の育成
- ・広義の編集的思考・記事執筆力の涵養～編集者・ライターへの育成
- ・戯曲・脚本の研究・創作～脚本家（シナリオライター）の育成

そこで、ここからは上記3領域の産業構造や市場状況に変化への対応について詳述する。

#### 文芸市場の変化に対応した、小説の研究・創作～小説家の育成

ご承知のとおり、文芸書（小説ほか）の市場は縮小しているものの、今後は縮小維持された市場のなかで従来のベストセラー偏重時代からロングテール時代に移り、文芸書のニーズが細分化され、少数派をターゲットにした「多品種少量生産的」になることが予想される。

現在、その変化を象徴するかのように独立系小規模出版社（リトルプレス）がさまざまな地域に増えている（京都は特にそれが多土地）。また、電子書籍市場においては、作家が電子データをネット経由で直接販売する方法も台頭しており、言わば「作家の一人出版社時代」の到来も見てとれる。

#### 人材需要の拡大に合わせた広義の編集的思考の涵養と、編集者・ライターの育成

編集者・ライターの分野では、従来の出版業界のほかに、自社発信の広告的ウェブメディアを運営する一般企業が急増しており、社会全体としては編集的思考や取材・行動力、ライティングスキルをもつ人材需要そのものが高まっている。とくにエディタースhipという概念は、従来のコンテンツ制作だけに運用されるものではなく、地域デザインや人々のライフデザインの変革や課題解決など、より幅広い領域に求められるものになっている。すなわち、社会そのものの変革や課題解決において重要な力となるのである。

## コンテンツ需要の拡大に合わせた脚本家（シナリオライター）の育成

物語創作という意味では小説と共通する脚本（シナリオ）については、その主たる供給先である演劇業界、放送・映画業界、ゲーム業界における人材需要の変化に対応している。

放送・映画業界については、近年は地上波放送に加え、衛星波やネット配信のドラマ・映画の拡大、アニメの世界的市場拡大が顕著である。もはや「戯曲」という文学用語は、旧来の演劇脚本だけのものではなく、映画脚本（シナリオ）においても通ずるものとして、いわゆる「シナリオ文学論」も叫ばれている。また、ゲーム業界においても、豊かなストーリー性を取り入れたゲームコンテンツが国内外で高い人気を誇っており、その進化に伴いゲームシナリオライターの人材需要はますます高まっている。

それらを考慮すると、いわゆるストーリーメーカーとしての脚本家（シナリオライター）の人材需要の高まりと同時に、その活躍の範囲もますます広がっている。現在ハリウッドではシナリオアナリストの需要が拡大しているように、今後は物語構造そのものに造詣が深い人材が創作者と研究者の双方で必要とされる。

こういった時代の変化に対応すべく、文芸表現学科では以下の学科パンフレット【資料 1-1-4】にも記載されているとおり、「ことばの表現」における多様な文芸ジャンルについての教育課程を理論（講義）と実践（演習）の双方から構築し、その過程を通して涵養された能力、すなわち「ことばの力」によって社会を変革できる人材の輩出を目指しているのである。

### **ストーリーをつむぐ、新しい世界をつくる。**

#### **小説家、脚本家、ライター、編集者など「ことばのプロ」を目指す。**

小説、戯曲・脚本、エッセイ、取材執筆、編集、詩、短歌・俳句など、「ことば」の表現によって、さまざまな物語や文芸作品を生み出すコースです。卒業後の進路は、小説家やライター、編集者、新聞記者のほか、広告業界のコピーライターや、テレビ・ラジオ・映画・演劇・ゲームを横断する脚本家（シナリオライター）や放送作家などさまざま。「ことばの力」で活躍するクリエイターを目指します。

### (3) 1-1 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

こういった人材を育成するために、文芸表現学科では今もなお、そしてこれからも、常に教育内容の自己点検を実施し、必要に応じて適切な改善策を講じている。

まず、1年次から3年次まで段階的に発展させていく専門必修科目（文芸表現シリーズ）においては、「読む、書く、編む、聞く、話す」といった言語表現の基礎的な学びを出発点として、年次ごとにより分野横断的な学び、リベラルアーツの学び、歴史や社会についての学び、各種マーケットの理解、編集的・広告的な思考の学びなどを取り入れ、多分野の教育の質保証を重視している。これらによって、書いて創作・表現するという「創造力」と、それを社会に結びつける「人間力」の両立を目指している。

また、これまでの出版業界中心から、映画・放送・ゲーム業界なども含めた、文芸表現学科の領域拡大は、先述したマルチマインドな人材を育成するための基盤強化につながり、言葉によって未来の社会を生き抜いていくための知見と逞しさの涵養に結実する。

こういったことは、より複雑化し、混迷を極めていく未来において、実学のみでは解決できない「人間と社会」そのものへの根源的な問いを考察する重要な鍵となり、それが文芸表現の社会的意義と重要性を更新し、本学の「藝術立国」の理念に資するものである。

今後の文芸表現学科としては、これらの学科教育目標と基本使命を大きな旗として掲げ、より広く高校生・受験生、その保護者に向けた広報活動に尽力する。また、学科教育目標にかなった魅力的な人材を多く輩出することによって、未来の社会における文芸表現のプレゼンス向上に取り組んでいく所存である。

#### 基準項目 1-1 エビデンス資料一覧

【資料 1-1-1】建学の理念・使命・目的

【資料 1-1-2】京都芸術大学学則 別表 3

【資料 1-1-3】京都芸術大学 芸術学部 学科教育目標

【資料 1-1-4】京都芸術大学 芸術学部 文芸表現学科パンフレット

## 基準 2 学生

### 本基準の趣旨

高等教育機関として、大学は、その使命・目的を実現するために必要な規模の学生を受入れ、その成長を促進し、社会で活躍することができるための専門的知識・能力を養成することが求められます。ここでは、そのことを実現するための組織的環境や取り組みを「学生」の観点から確認します。

学生の受け入れにあたっては、本学の教育目標に基づき、アドミッション・ポリシーを策定しています。アドミッション・ポリシーに基づき、入学者選抜が適正に行われているか、また、大学経営の視点からは、適正な志願者数が確保できているかが重要になります。

受け入れた学生に対しては、学生が成長できるように必要な学修環境を整備し、学生生活の安定化を図り、組織的な学修支援に取り組むとともに、社会的・職業的な自立に向けた指導を通じて、自らのキャリアを形成し、本学が教育目標に掲げる「社会の変革を牽引することのできる人材」の育成に努めることが求められます。こうした学生支援は、大学全体で行う専門的な支援とあわせて、担当教員制度<sup>1</sup>や DPA 面談<sup>2</sup>等の制度を通じて行う学生支援、さらには日常的な学習指導等との有機的な連携・協働が重要です。

また、学生の意見・要望を的確に把握し、活用することも重要な取り組みとなりますが、これについては基準 5 の内部質保証の機能性の項で確認することとします。

---

#### 1 担当教員制度

入学時から卒業まで、学生一人ひとりに担当教員を配置する制度。担当教員については、新年度ガイダンス等で学生に知らせるとともに、学修ポータル「A-Portal」からも確認できる仕組みを設けている。学生は担当教員が明確化されることにより、学修や学生生活に関する相談がしやすくなるため、学修不振等が深刻化する前にケアを行うことが可能な体制となっている。担当教員による面談等の内容・所見は、「A-Portal」の「学生サポートメモ」に記録することにより、教職員は、その所属や権限に応じていつでも閲覧することができ、担当教員間の引き継ぎや、学生状況の共有、事務局各課と連携する際に活用し、個々の学生に対する継続的な支援に役立っている。

#### 2 DPA 面談

学修成果を可視化するための学修管理システム「DPA (DP 達成度評価)」を活用して行う面談制度。学生自身が学修の PDCA サイクルをまわせるようになることを支援するため、学生と担当教員とが 1on1 を行い、目標設定やふりかえりに対するフィードバックを行う。1 年次は DPA の活用方法を身につけるとともに、主体的な学修計画を立てるための基礎を身につけさせるため、年 3 回実施する。2～3 年次は一定の主体的学修態度を身につけていると考え、学生自身が DPA を活用して学修計画を立てられることを前提とし、全員を対象とする DPA 面談は、年度末に 1 回実施する。担当教員は、DPA を通じて伴走支援を行うほか、課題のある学生について集中した支援を行う。尚、4 年次の DPA 面談は行わず、ゼミ等を通じて個別支援を行っている。

## 基準項目 2-1 学生の受け入れ

- ①アドミッション・ポリシーに明示する資質・能力を備えた学生を確保できているか
- ②学科魅力（特色）の訴求力

### (1) 2-1 の自己判定

基準項目 2-1 を満たしている。

### (2) 2-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①アドミッション・ポリシーに明示する資質・能力を備えた学生を確保できているか

本学のアドミッション・ポリシーであるが、本学ウェブサイト「求める学生像および入学者選抜の基本方針」【資料 2-1-1】について以下のように定められている。

京都芸術大学芸術学部は、『藝術立国』の基本使命に基づき、芸術による社会の変革をめざしていくために、ディプロマ・ポリシーに掲げる『人間力』と『創造力』、およびそれらを構成する『6つの能力』を身につけた人材を育成します。そのための入学者受け入れ方針として、本学の基本使命や教育目標に共感し、芸術を学び、芸術を社会に活かそうとする意欲を有していることに加え、以下のような資質・能力がある者を求めます。また、入学者選抜法としては、入学者に求める資質・能力をより適切に評価するために、多様な選抜方法を実施し、多面的・総合的な評価を行います。

さらに「入学者に求める資質・能力」として、以下が挙げられている。

- ・生涯を通じて学び続けるための基盤となる、基礎的・基本的な知識・技能
- ・知識・技能を活用して、答えが一つに定まらない課題も解決できる思考力・判断力・表現力
- ・主体性を持って行動し、多様な人々と協働して学ぶ態度

それらを受けて、本学科では「人材の養成に関する目的」として、学科教育目標【資料 2-1-2】の「ことばによる新しい表現を模索する『創造力』と、他者と協働し自分たちのことばを社会につなげていく『人間力』を備え、社会に新しい価値を産みだすことのできる人材を育成」を目指している。

また、上記に沿った資質・能力を備えた学生を確保するため、直近5年（2021年度入学者選抜～2025年度入学者選抜/実施年度は2020年度～2024年度）は、以下の多様な区分の入学者選抜（入学試験）を実施してきた。なお、募集定員は2021年度入学者選抜～2023年度までが40人、2024年度～2025年度までが45人である。

入試区分	定員に対する充足率
体験授業型選抜Ⅰ期・Ⅱ期	60%（Ⅰ期 50%、Ⅱ期 10%）
科目選択型選抜Ⅰ期・Ⅱ期	20%（Ⅰ期 10%、Ⅱ期 10%）
面接型選抜Ⅰ期・Ⅱ期	若干名
大学入学共通テスト利用型選抜Ⅰ期・Ⅱ期	若干名

その他、「指定校推薦」「帰国生徒」「追試験」「留学生選抜」「日本留学生試験利用入学試験」など、特殊ケースをカバーするための入試区分もいくつか用意されているものの、文芸表現学科の直近5年ではこれらを利用する志願者がほとんどいないため、省略する。

上記の主要な入試区分のうち、募集定員の6割を選抜している体験授業型選抜Ⅰ期・Ⅱ期が、もっとも「学科の人材の養成に関する目的」に沿った資質・能力を見極める試験であると位置づけられる。これは志願者（受験生）が文芸表現学科に1日体験入学をして、実際に本学科で実施されている授業をいくつか受講した結果、そこでのパフォーマンスや提出された成果物などを学科教員全員で採点し、合否判定をするものである。

そんな体験授業型選抜であるが、ここからは2024年度に実施された「2025年度入学者用\_体験授業型選抜Ⅰ期・Ⅱ期」がどのような内容であったのか、その詳細を述べる。

#### 2025年度「体験授業型選抜Ⅰ期」 実施：2024年9月13日～15日（3日程）

Ⅰ期入試のねらいは、小説や脚本などのフィクション系創作を志望する受験生にリーチし、1日で4講時分（3日程）の体験授業を通して、その能力・資質を見極めることである。

2024年9月に実施された各授業内容は、以下の通りである。【資料2-1-3】

講時	体験授業内容
1 講時	掌編小説（2000字～4000字程度）の読書会
2 講時	掌編小説（2000字～4000字程度）を400字で要約する
3 講時	テーマに即して、原稿用紙2～3枚のストーリーを書く
4 講時	キャリア授業を受けてレポートを書く
授業外	面談

上記の体験授業の内容は実際に本学科でおこなわれている学びにきわめて近い。それらを体験してもらうことで、教員側だけでなく、受験生にも入学後に授業についていけそうかどうか、についてのイメージを具体的に抱いてもらう。フィクション系の創作をめざす層にリーチするため、充実した創作をおこなっていけるだけの基礎的な知識や技能をもっているかどうかはもちろんのこと、主体的に学びを深めていけるか、学んだことを社会に還元できるかどうかについてのポテンシャルも評価の対象としている。

#### 2025年度「体験授業型選抜Ⅱ期」 実施：2024年10月12日～13日（2日程）

一方、体験授業型Ⅱ期のねらいは、フィクションを創作する創造力・発想力よりも、論理的思考力や文章表現力に長けた層にリーチし、1日で4講時分（2日程）の体験授業を通して、そ

の能力・資質を見極めることである。

2024年10月に実施された各授業内容は、以下の通りである。【資料 2-1-4】

講時	体験授業内容
1 講時	掌編小説（2000 字～4000 字程度）の読書会
2 講時	掌編小説（2000 字～4000 字程度）を 400 字で要約する
3 講時	テーマに即して、原稿用紙 2～3 枚のエッセイを書く
4 講時	I 期とは別の内容のキャリア授業を受けてレポートを書く
授業外	面談

上記 1 講時～2 講時の「読書会」と「要約」については、扱う作品は変わるものの、ねらいとしては I 期と同様である。II 期のねらいである「論理的思考力」の見極めについては、読む力と要点をまとめる力を問うことは不可欠だからである。

しかし、3 講時については I 期の「ストーリーを書く」から、II 期では「エッセイを書く」に変更することで、あきらかに I 期入試と異なる能力の見極めをおこなっている。この II 期入試においては、論理的思考力と基礎的な文章表現能力を活かして、入学後に編集者やライターの領域の学びを深めていけそうな人材にアプローチしているのである。

#### 評価・採点について

その他、I 期と II 期の両方とも教員によるキャリア授業を受験生が傾聴してレポートにまとめる授業や、教員二人体制による受験生ひとりひとりの面談もあり、大学で学修するにあたっての基本的な姿勢や資質、文芸を学ぶ熱意や適性を見極めもおこなっている。

採点については、文芸表現学科の体験授業型選抜で実際に使用されている採点シート【資料 2-1-5】のとおり、授業を通して提出された各成果物や面談の結果を、教員二人体制で分担採点することで、公平性と合議性の双方を担保している。これらを通して、上述した「人材の養成に関する目的」に沿う「創造力」と「人間力」をそなえた人材の評価をおこなっている。

次に入学者の学修状況であるが、入学初年度にあたる 1 年次の GPA、単位修得状況、離籍率などについて点検する。【資料 2-1-6】

#### 2021 年度入学生の初年次学修状況

- ・1 年次終了時点での GPA は、体験授業型選抜による入学者 35 名の平均値が 2.08、それ以外の選抜による入学者 9 名の平均値が 2.05（学部平均は 2.00）。
- ・1 年次終了時点での単位修得数は、体験授業型選抜による入学者 35 名の平均値が 41.67、それ以外の選抜による入学者 9 名の平均値が 41.5（学部平均 43.85）。
- ・1 年次離籍率は、体験授業型選抜による入学者 35 名については 5.6%、それ以外の選抜による入学者 9 名については 0%（学部平均 3.2%）。

#### 2022 年度入学生の初年次学修状況

- ・1 年次終了時点での GPA は、体験授業型選抜による入学者 31 名の平均値が 1.81、それ以外の選抜による入学者 12 名の平均値が 1.92（学部平均は 2.04）。
- ・1 年次終了時点での単位修得数は、体験授業型選抜による入学者 31 名の平均値が 34.79、それ以外の選抜による入学者 12 名の平均値が 41.42（学部平均 44.34）。
- ・1 年次離籍率は、体験授業型選抜による入学者 31 名については 5.9%、それ以外の選抜による入学者 12 名については 0%（学部平均 4.9%）。

#### 2023 年度入学生の初年次学修状況

- ・1 年次終了時点での GPA は、体験授業型選抜による入学者 38 名の平均値が 1.96、それ以外の選抜による入学者 6 名の平均値が 1.6（学部平均は 2.07）。
- ・1 年次終了時点での単位修得数は、体験授業型選抜による入学者 38 名の平均値が 41.66、それ以外の選抜による入学者 6 名の平均値が 32.05（学部平均 44.78）。
- ・1 年次離籍率は、体験授業型選抜による入学者 38 名については 0%、それ以外の選抜による入学者 6 名については 33.3%（学部平均 2.7%）。

#### 2024 年度入学生の初年次学修状況（カリキュラム変更初年度）

- ・1 年次終了時点での GPA は、体験授業型選抜による入学者 38 名の平均値が 2.14、それ以外の選抜による入学者 6 名の平均値が 2.17（学部平均は 2.16）。
- ・1 年次終了時点での単位修得数は、体験授業型選抜による入学者 38 名の平均値が 37.61、それ以外の選抜による入学者 6 名の平均値が 35.37（学部平均 40.35）。
- ・1 年次離籍率は、体験授業型選抜による入学者 38 名については 5.0%、それ以外の選抜による入学者 6 名については 16.67%（学部平均 3.5%）。
- ・なお、2024 年度からは新カリキュラムに変更されているため、上記の結果については、前年度までと単純比較ができないことを補足しておく。

以上、いずれの数値も学部平均と比べて突出したものとはいいがたいが、大きく乖離しているわけでもないことから、現行の入学者選抜は、アドミッション・ポリシー及び学科の「人材の養成に関する目的」に沿って適切に実施されていると言える。

#### ②学科魅力（特色）の訴求力

直近 10 年の文芸表現学科の実志願者数（本学科第 1 志望の出願者のみをカウント、また複数回受験しても 1 人とカウント）、延べ志願者数（第 2 志望以下の志願者も含む、1 回の出願につき 1 人とカウント）および実志願倍率（実志願者数／入学定員）の推移【資料 2-1-7】を見ると、大学全体の実志願者数が大幅に増加した 2017 年度以降、学科の知名度も向上し、2019 年度

より実志願者数が大きく増加した。その後、コロナ禍による募集不振（2021年度）をいったんは克服したものの（2022年度）、2023年度以降は減少に転じている様子がうかがえる。延べ志願者数についても、増減についてはおおむね実志願者数の増減に一致している。

ここ5年のうちに延べ志願者数も実志願者数も、志願倍率も実質倍率も下降し続けていることは由々しき問題であるが、その一方で2025年度の志願者数を、志願者数がピークであった2020年度、また、もっとも多くの合格者を出す体験授業型入試Ⅰ期（当時。現、総合型選抜Ⅰ期）で3学科以上の併願が可能となり延べ志願者数が急増した2022年度と比べると【資料2-1-7】、本学科第1志望者で構成される実志願者の減少に比べ、第2志望以下も含めた延べ志願者の減少は若干緩やかであり、このことから、直近3カ年の実志願者減の原因は、物語性をもつ文芸創作以外のジャンルを学ぶことができる他学科、他大学との競合にあると捉えている。

それを承け、文芸表現学科が扱う諸領域の最大公約数として「ことば」をキーワードに受験生に訴求してきたこれまでのアプローチに代え、学科で学べるさまざまなジャンルの魅力を伝える戦略へと転換し、必ずしもアウトプット＝小説、進路＝作家に限らない学科として、オープンキャンパスでの体験授業等を展開している。

なかでもとくに、シナリオ（映像脚本等）、戯曲の創作は、映像作品（映画等）、舞台作品を専門とする学科でも、独立した領域としてカリキュラムに組み込まれるケースは少なく、当学科で独占的に学べる一領域として強く押しだしているところである。

上述の結果を受けて、本学科としては学生募集活動のテコ入れは喫緊の課題であると捉えており、トライアンドエラーを繰り返しながら毎年の戦略を立てている。当学科では2021年度より、独学で小説家を目指すといったことに対する、大学で文芸を学ぶことの優位性を実感してもらう機会として、受験生が作品を持ち寄って行う「オンライン合評会」など、学生募集のための学科独自イベントを展開してきたが、2025年度学部方針において、学科独自の学生募集活動についてのふりかえり、再設計が求められたことに応えて、これまでのデータの分析に基づいて、学科の学生募集戦略を全面的に見直した。

その結果、2026年度学生募集においては、毎月のように開催されるアドミッション・オフィス主催のオープンキャンパス、学科主催の体験授業イベントなどに、受験生が3回以上参加すると出願率が急増していたというこれまでの結果をふまえて、リピート参加を促すことに重きをおく形で年間のオープンキャンパスやイベントを実施している。

### (3) 2-1 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

大学のアドミッション・ポリシーに準拠した入試の実施およびその結果の追跡については、基準項目 2-1-①で述べたとおり、おおむね問題はないといえる。

その一方、志願者の獲得という点については、基準項目 2-1-②で述べたように苦戦を強いられている状況である。そこで詳述したような、アドミッション・オフィス主催／学科主催の体験授業等のメニューの見直しなどを経て、現在進行中の 2026 年度学生募集においては、2025 年 6 月末の時点で 212 人の接触者を獲得しており（前年同時期比、+52 人）、学生募集復調の兆しをみとることができる。今後の継続的な努力が望まれる。

#### 基準項目 2-1 エビデンス資料一覧

【資料 2-1-1】 アドミッション・ポリシー

【資料 2-1-2】 京都芸術大学学則 別表 3

【資料 2-1-3】 2025 年度入学「体験授業型選抜Ⅰ期」実施要項

【資料 2-1-4】 2025 年度入学「体験授業型選抜Ⅱ期」実施要項

【資料 2-1-5】 2025 年体験授業型選抜採点シート

【資料 2-1-6】 入学後の学修状況

【資料 2-1-7】 直近 10 ヶ年の志願者数データ

## 基準項目 2-2 学修支援

- ①主体的学修への転換
- ②教職協働による組織的な学修支援の充実
- ③専門的学修支援組織との連携
- ④学生相互の学び合いの機会創出

### (1) 2-2 の自己判定

基準項目 2-2 を満たしている。

### (2) 2-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①主体的学修への転換

2024 年の教育改革により施行された全学共通新カリキュラムの大きな目玉は、従来の 1 年間を前期・後期の 2 期に分けた Semester 制から、前期 2 クォーターと後期 2 クォーターの 4 期に分けた「クォーター制」への変更であった。これによって、従来は 1 科目につき「週 1 回 80 分授業×全 14 週=14 回授業（1 セメスター）」だった授業が、1 科目につき「週 2 回 100 分授業×全 7 週=14 回授業（1 クォーター）」となった。これはすなわち、1 科目をこれまでより半分の期間（14 週⇒7 週）で学修することを意味しており、それを実現するために「密度の濃い主体的な学修サイクル」を学生に定着させることが求められるようになったのである。

以上をふまえて、2024 年度の文芸表現学科では、新入生に対して次の施策を実行した。

#### 4 月の新入生ガイダンスでの重要事項説明

2024 年 4 月に実施した 2024 年度新入学生ガイダンスの席において、学科長による文芸表現学科カリキュラムの全容説明、なかでも「密度の濃い主体的な学修サイクル」の定着について、全新入生に向けての重要事項として説明をおこなった。【資料 2-2-1】

具体的には、履修した授業の単位を修得するためには授業外の時間を活用して事前学修・事後学修に主体的に取り組む必要があるということである。この新カリキュラムでは、学生がひとつのクォーターに履修する科目が少なくなるため、時間割に余裕が生まれるのだが【資料 2-2-2】、それら授業のない時間帯や授業のない日は休みではなく、そこが事前学修・事後学修に取り組む時間帯であるということを指示した。

#### ガイダンス後の新入生履修面談

上記ガイダンス後には、ただちに新入生履修面談を実施した。新入生 48 人を 6 人の専任教員で分担し（教員 1 人につき 7~8 人の新入生を担当）、ひとりひとりの将来ビジョンや目標設

定、前期履修計画を点検することで「密度の濃い主体的な学修」を促した。【資料 2-2-3】

その際、基準項目 2 の序文で注釈されている本学独自の学修管理システム「DPA（DP 達成度評価）」を活用。このシステムに新入生自らが入学時プランとして自分の目標設定を項目ごとに入力し、その後、担当教員がフィードバックコメントを入力することで、その結果を活用しながら面談を実施するというフローを確立した。これが「DPA 面談」である。

### 5 月以降も年間 3 度にわたる 1 年生 DPA 面談を実施

この DPA 面談（担任制）は、6 月の 1 クォーター終了後にも実施し、これまでの学修状況を振り返って、入学時に立てたプランが順調に進行しているかを確認している。このように各教員が担当 1 年生の主体的学修の状況を確認し、PDCA サイクルの確立を促進することで主体的学修のサイクル定着を図った。

次に前期終了後（2 クォーター終了後）の 9 月にも 1 年生 DPA 面談を実施。教員が担当 1 年生とともに前期の学修結果を振り返って、その反省点を活かしながら後期の新たな目標を DPA に入力。さらなる主体的学修の定着をはかった。

最終的に、2024 年度末の 3 月にも 1 年生 DPA 面談を実施。1 年次のふりかえりと担当教員によるフィードバックをおこなうことで主体的学修の定着を確認し、さらなる発展を促した。

このように入学時に主体的学修の重要性を説いたあとに、年 4 回の担当教員による DPA 面談を実施して、学生が主体的学修を実践できているか、そのための PDCA サイクルを回せているかどうかを定期的に確認してきた。

また、学生ひとりひとりに担当教員【資料 2-2-4】がつき、年間を通じて学修の伴走をするだけでなく、各授業の担当教員が事前・事後学習を具体的に指示することによっても、主体的学修の定着や PDCA サイクルの確立を促している。

その他、たとえば 2 週連続欠席した学生については、隔週に実施している学科会議において全教職員で共有し、対策を実行。また、出席は足りているものの未提出課題が複数あり、単位修得が困難な学生は授業期間終了後に別途締め切りを設けて課題提出の督促をおこなうなど、主体的学修が十分に定着しているとはいいがたい学生への個別支援についても、学科会議時で情報を共有し、議事録としても残したうえで教職員一丸となって取り組んでいる。【資料 2-2-5】

2～3 年生以上については、主体的学修が十分に定着しているという前提で、適宜、伴走的に支援している。全学年を通して、支援の内容としては、担当教員と学生（および保護者）の対面（オンライン含む）面談での聞き取りとフィードバックを実施している。

## ②教職協働による組織的な学修支援の充実

### 教職協働の組織的学習支援について

上述した新入生ガイダンスや1年生履修面談に加え、2年生以上についても前後期ごとの履修ガイダンスと履修面談を実施している。6人の学科専任教員（常勤教員）が各学年6～8人ずつの学生を担当し、定期面談から日ごろの学生生活における相談まで、緊密に連絡をとっている。

また、学科担当の事務職員2人によって学生出欠データを毎週共有され、担当教員が欠席状況を把握している。そこで2週連続欠席状況を示した学生には、担当教員が個別に連絡を取り、状況のヒアリングを行なっている。そこで知り得た心身の不調の問題や、家庭環境に起因する問題、経済状況の変化などを、必要に応じて学科会議で全教職員に共有している。

学科会議では経過観察中の学生と、喫緊に対応の必要な学生に分類し、課題未提出者などの洗い出しも行なうなど、教職員で連携しながら適切な対策をとっている。【資料 2-2-6】

### 成績不振者、退学希望者への対応について

成績不振学生へは、修学指導面談を行なう。その基準等は、在学生専用サイトに以下のとおり記載されている。【資料 2-2-7】

#### 成績不振者への対応

次に掲げるいずれかに該当する学生は、修学指導の対象とします。

- (1) 直近の GPA (学期) が 1.5 未満の学生
- (2) 進級及び卒業不可となった学生

履修指導対象学生は、学業を改善するため、学習計画書を作成し、アカデミック・アドバイザーに提出しなければなりません。成績結果や学習計画書の内容によっては、アカデミック・アドバイザーとの面談を求めることがあります。前述の事由により、2学期連続して修学指導の対象となった学生は、各学期成績公開後、保証人にその旨を報告します。なお、学業改善が見られない場合は、アカデミック・アドバイザーに加え、教務部長等による面談を行います。面談において、卒業の見通しがないと判断した場合は退学を勧告することがあります。

修学指導面談は当該学期の GPA の数値や、それまでの経過・累積によって「段階／フェーズ」が分かれており、実施要項に沿って【資料 2-2-8】、教職協働で実施している。

また、修学指導面談の対象学生は、面談後に「学習計画書」を提出し、アカデミック・アドバイザーという名の専門職員の指導のもと学修状況の改善をはかる。

また、退学希望者に関しては、学生より「退学願い」が手交された段階で、担当教員による面談を実施。担当教員所見を記入したのち、退学願へ担当教員・学科長が押印し、学生課へ提出する。面談では、退学希望に至る事情のヒアリング等を行ない、学生自身の将来に向けたよりよい選択肢を一緒に模索し、アドバイスしている。

### ③専門的学修支援組織との連携

以下は、本学の障がい学生支援制度に申請した文芸表現学科の学生数の推移である【資料 2-2-9】。年によって多少のばらつきはあるものの、毎年 3%~9%の学生が障がい学生支援を必要としているとわかる。

	2020	2021	2022	2023	2024
	文芸	文芸	文芸	文芸	文芸
JASSO 障がい学生数	10	6	10	17	11
在籍学生数	174	185	191	189	188
障がい学生数割合	5.7%	3.2%	5.2%	9.0%	5.9%

本学は、2024 年 4 月から学生の身体の健康と修学をサポートする「学生支援センター」を新設した。【資料 2-2-10】

ここでは、従来の「保健センター」「学生相談室」「障がい学生支援室」を、それぞれ「健康支援室」「学生相談室」「UDL (Universal Design for Learning) 推進室」へと名称変更し、なかでも「学生相談室」では、臨床心理士もしくは公認心理士有資格者によるカウンセリングやコンサルテーションを受けることができる。また、対象となる学生に関する保護者や教職員からの相談も可能であり、教職員の心理的負担の軽減にも寄与している。

学生相談室の開室時間は月曜から金曜の、10 時~18 時（祝日や夏季・冬季休暇を除く）であり、個人情報保護とプライバシー保護の観点から、基本的には事前予約制をとる。

この学生支援センターでは、文芸表現学科 2 年次学生の実例資料【資料 2-2-11】に記載のとおり、学科教職員と専門的な学修支援組織とで連携をとりながら、日々の学生支援に取り組んでいる。

### ④学生相互の学び合いの機会創出

文芸表現学科では、通常の正課授業のほかに、学生相互の学び合いの機会を創出するべく、主に放課後を活用した正課外での多様な取り組みも積極的に実施している。

以下、その代表的な取り組みを列記する。

#### 学科公認短歌サークル「上終歌会」による定期的な歌会の実施

2016 年、歌人で本学客員教授を顧問として、文芸表現学科の在籍学生・卒業生有志らが学科公認の短歌サークル「上終歌会（かみはてかかい）」を立ち上げた。学科正課の短歌授業をベースとしながら、より短歌についての学生相互の学び合いの場を生み出すべく、放課後の文芸表現学科ゼミ室やその他教室を利用して、月一度のペースで歌会を開催。2025 年の今年、10 周年を迎える。

歌会では、まず一人2首ずつの短歌を持ち寄り、そのなかから作者名を伏せたうえで、参加学生がそれぞれ「好きな歌」に投票。開票後は、各歌についての解釈や批評などを学生が発表・共有し、議論を交わしながら学生相互で短歌の学びを深めていく。今年2025年に10周年を迎え、これまでに会報誌を3冊発行するなど、精力的な活動を展開。京都新聞にも二度取り上げられ、2017年には当時の代表学生がKBS京都ラジオにも出演した。

また、この歌会出身の卒業生のなかには、現在は作家として活躍する仲西森奈、駒田隼也（第65回群像新入文学賞、2025年上半期・芥川賞候補）、歌人・井村拓哉（笹井宏光賞・文月悠光賞）、詩人・山内優花（2024年「ユリイカの新人」）などがある。

### 学科公認俳句サークル「いち俳句会」による定期的な句会の実施

2023年、俳人で本学非常勤講師を顧問として、上終歌会の俳句会版とも言える「いち俳句会」が学生有志によって立ち上げられた。こちらも学科正課の俳句授業をベースとしながら、より俳句についての学生相互の学び合いの場を生み出すべく、歌会と同じ要領で定期開催している。

### 京都文芸座脚本部による学科公認「脚本読書会」の定期開催

2023年、学科長・山田隆道を顧問として、文学としての「戯曲・脚本」の学びをより深めるべく、学生有志による学科公認の脚本部が立ち上げられた。以降、月に一度のペースで、古今東西の名作戯曲や映画脚本について、その魅力や解釈を語り合う脚本読書会を開催。顧問の指導のもと、現代の岸田國土戯曲賞受賞戯曲や日本アカデミー最優秀脚本賞受賞脚本から、W.シェイクスピアやA.チャーホフなど世界的な古典戯曲まで幅広く扱っている。

### (3) 2-2 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

文芸表現学科では以上のような学修支援を教職員協働で組織的に取り組んでいるものの、まだまだ改善の余地はある。とくに課題点として注目したいのが、修学の途中で転籍・退学してしまう学生数の推移である。近年の学籍異動データ【資料 2-2-12】を見ると、入学初年度である 1 年次末までに転籍・退学する学生数は、直近 5 ヶ年すべてにおいて 5%未満（学年で 2 人以下）をキープしているものの、2 年次以降にその数値が止まることはなく、学年が上がるごとに微増を続けていき、4 年目末の標準年限卒業時となると、毎年のように 10%以上の学生が転籍・退学していることがわかる。本来なら、2 年次以降は学修に慣れていくものであるため、2 年末あるいは 3 年末あたりで転籍数に歯止めがかかり、以降は卒業まで安定する状態が理想である。

しかし、現在の文芸表現学科はまだこの領域には達しておらず、学年が上がるごとに一定数の転籍者を出してしまっている。教職員協働による学修支援はどうしても入学初年度の 1 年生が中心となるが、今後は 2 年以降の成績不振者をいかに向上させて安定水域にもっていくのかということにも気を配らなくてはならない。とくに進級要件ぎりぎりに進級した 2 年生や 3 年生は、今後の留年予備軍になることはもちろん、延いては転籍にもつながる可能性があることを強く肝に銘じて、組織的な学生支援を全学年に向けることを促進していく。

#### 基準項目 2-2 エビデンス資料一覧

- 【資料 2-2-1】2024 年度\_新入生ガイダンス資料
- 【資料 2-2-2】2024 年度\_前期 1 時間割
- 【資料 2-2-3】2024 年度\_新入生履修面談スケジュール
- 【資料 2-2-4】2024 年度\_1 年生担当教員一覧
- 【資料 2-2-5】2024 年度\_学科会議議事録（7 月 3 日）
- 【資料 2-2-6】2024 年度\_学科会議議事録（1 月 8 日）
- 【資料 2-2-7】在学生専用サイト「成績不振者への対応」
- 【資料 2-2-8】2024 年度\_後期修学指導面談実施要項
- 【資料 2-2-9】直近 5 年の JASSO 報告に基づく障がい学生数、留学生数
- 【資料 2-2-10】学生支援センター
- 【資料 2-2-11】学生支援センター利用の実例
- 【資料 2-2-12】直近 5 年の学籍異動データ

## 基準項目 2-3 キャリア支援

- ①教職協働によるキャリア支援の充実
- ②専門的キャリア支援組織との連携

### (1) 2-3 の自己判定

基準項目 2-3 を満たしている。

### (2) 2-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①教職協働によるキャリア支援の充実

教職協働によるキャリア支援を述べる前に、まずは文芸表現学科における正課授業のキャリア教育について共有しておきたい。これは1年次～3年次まで続く学科必修科目として、以下の通り段階的・継続的に編成されている。

#### 2024 年度入学生の 1 年次キャリア教育

2024 年の教育改革に伴う文芸表現学科の 1 年次キャリア教育については、2024 年度に実施された 1 年次の正課授業のなかで実施された。該当するのは 2024 年度から施行された新カリキュラムマップ【資料 2-3-1】において、1 年次 4 クォーターに開講された進級必修科目「進級研究・制作 1」である。この授業では、1 クォーター開講の必修科目「文芸表現入門」と 3 クォーター開講の必修科目「文芸表現基礎」の内容を引継ぎ、そこからキャリア的要素につなげて統合するかたちで、初年次キャリア教育に即した内容を取り入れている。

その前に 1 クォーター「文芸表現入門」と 2 クォーター「文芸表現基礎」を通して重視したことを述べるが、ここでは初年次からいきなり就職活動を意識させた文字通りのキャリア授業を取り入れるのではなく、その準備段階として、すべての文芸表現の基礎教養である「読む、書く、編む、聞く、話す」の学びを実践的に涵養することである。こうすることで、他者や社会に意識を向けた「ことばの表現」を学び、さらに文芸表現と社会の結びつきにまで思考を発展させ、キャリアのレディネス形成を目指した。

このレディネス形成期を経て、初年次の総仕上げとなる 4 クォーターの進級必修科目「進級研究・制作 1」のキャリア関連授業では、2024 年度と同授業のシラバス【資料 2-3-2】にも記載されているとおり、新入生が最初に大志を抱きがちな「小説家」「脚本家（シナリオライター）」「編集者」「ライター」の文芸専門 4 職種についての業界基礎知識やデビュー方法、ロールモデル（フリーランスとしての働き方含む）などを学ぶこととした。

なお、2024 年度と同授業においては、この文芸専門 4 職種についての事前リサーチ課題と事後レポート課題を設けたところ、その提出状況は以下の通りであった。【資料 2-3-3】

	小説家の仕事	脚本家の仕事	編集者の仕事	ライターの仕事
事前リサーチ 課題提出率	93%	89%	91%	89%
事後レポート 課題提出率	84%	87%	87%	91%

表2【資料 2-3-3】2024 年度\_1 年次キャリア課題提出状況より

また、最後に卒業生ロールモデルを扱った総括的なキャリアレポートも課したが、この提出率は 87%。これらを合計した 1 年次必修の全キャリア課題に対する総提出率は 89%であった。

この約 9 割という提出率からもわかる通り、2024 年度新カリキュラムにおける文芸表現学科の初年次キャリア授業は充実したものとなった。

2025 年度の 2 年次以降は、段階的にステップアップする必修科目を通して、出版業界、新聞業界、広告業界、放送・映画業界、ゲーム業界といった、文芸表現と結びつきの強いマスコミの各業界の研究、さらには個別の企業研究へと発展させていく計画である。

## 2024 年度の 2 年次キャリア教育

2024 年度の 2 年生は、2023 年度以前の入学生の旧カリキュラム・マップ【資料 2-3-4】が適用されており、それにおける学科専門の正課キャリア教育としては、前期の必修科目「文芸表現ベーシックⅡ」と後期の必修科目「文芸表現応用Ⅰ」が挙げられる。

前期必修の「文芸表現ベーシックⅡ」では、シラバス記載のとおり【資料 2-3-5】、文芸関連業種である京都市内の出版社・新聞社・広告制作会社から 1 人ずつ計 3 人のゲスト講師を招き、学生がそれぞれのゲスト講師にインタビュー取材を行うことで、業種理解を促進した。

次に後期必修の「文芸表現応用Ⅰ」では、同じくシラバス記載のとおり【資料 2-3-6】、上記 3 業種（出版・新聞・広告）のさらなる主体的調査・研究に加え、新たに放送・映画・ゲーム業界にまで教員によるレクチャーや学生による主体的調査・研究を広げている。

これらによって、文芸専門・応用職として位置づけられている作家・ライターなどの「書く仕事」から、出版・新聞・広告・放送・映画・ゲームといったマスコミ各業種の編集職・企画制作職など、いわゆるクリエイティブ職についての理解を 2 年次までに徹底することを図った。

また、2 年後期「文芸表現応用Ⅰ」の最終授業では、1 学年上の 3 年生から有志数人をゲストとして招き、自身のインターンシップ参加体験をもとにした報告会を実施。これによって、次年度にインターンシップ参加を控えた 2 年生の実践的な学びと意欲向上を図り、また、3 年生と 2 年生の縦の関係を構築することによって、有益な情報交換の促進を目指している。

## 2024 年度の 3 年次キャリア教育

2024 年度の 3 年生においても、上記の 2 年生と同じく、2023 年度以前の入学生の旧カリキュラムが適用されており、それにおける学科専門の正課キャリア教育としては、前期の学科必修科

目「文芸表現応用Ⅱ」が中核的な授業として挙げられる。

この授業は、シラバス記載のとおり【資料 2-3-7】、夏期休暇以降に3年生全員がインターンシップに参加することを旨として設計されており、そのための企業リサーチの方法やエントリーシートの書き方、インターンシップ応募促進など、極めて実践的なキャリア支援プログラムを実行した。これによって3年生は正課授業を通して社会に出る準備に取り組み、3年後期以降の本格的な就職活動につなげている。

また、この授業の最後には、1学年上の4年生から、すでに内定を取得している有志数人をゲストとして招き、自身の就職活動体験をもとにした内定者報告会を実施。これによって、後期からの就職活動を控えた3年生の実践的な学びと意欲向上を図り、また、4年生と3年生の縦の関係を構築することによって、有益な情報交換の促進を目指している。

正課のキャリア授業としては上述した3年前期必修「文芸表現応用Ⅱ」が最後となるが、これ以降も教職員協働による以下の正課外キャリア支援はつづく。むしろ、ここからはより学生ひとりひとりの個別事情に沿ったキャリア指導・進路指導が必要とされるため（全体授業では拾いきれない個別事情が多々あるため）、正課外での適切かつ細やかな指導・サポートが重要である。

なお、正課外での教職協働キャリア支援策の代表例としては実施した以下が挙げられる。

#### 京都市内のゲーム会社との連携によるゲームシナリオライターの育成

京都市内の人気ゲーム会社との連携で、文芸表現学科の学生を対象としたゲームシナリオライター募集活動を実施。2022年4月に学科内で募集を開始し、当時の1年生～4年生まで40人以上の学生が応募した結果、3人の学生が最初はアルバイトとして採用決定。その後、一定のアルバイト期間を経て、最終的に2024年3月卒生から1人、2025年3月卒生から1人の計2人が卒業後の正規職としてのゲームシナリオライターに採用された。

なお、この募集活動は2025年に4月にも第2回が実施され、2年生1人がまずはアルバイトとして採用されることが決定した。

#### 京都市内の総合出版社との連携による出版編集者の育成

京都に本社を置く総合出版社の協力のもと、2024年7月に正課外講座として「出版業界に就職するためのメソッド」を開講した。講師は本学科の2年生を主対象としたノンフィクション執筆の演習授業を担当していることもあり、本講座には2年次にその授業の履修していた3・4年生が多く参加した。

その結果、翌2025年3月から正式に新卒採用活動を開始した同社の編集者職に、学科から2人の内定者を輩出。また、その他の出版社にも1人が内定。この3人はいずれも上述した本講座の参加者であった。

また、3 年次後期からの本格的な就職活動については、ゼミごとの個別キャリア指導（正課外）が重要になってくる。最初は月一程度のキャリア面談から始まり、そこからは各個人の志望業種や熱意、能力、到達度、卒業後の人生のヴィジョンなどを総合的に判断して、その学生のことを一番よく知るゼミ担当教員が、一人につき 7～8 人のゼミ生の就活をきめ細かく指導していく。

ゼミごとの就活進捗状況については、隔週の学科会議で学科の全教職員に報告・共有され、問題点などがあれば、学科のキャリア担当教員を中心にその場で対策を議論し、実行に移すというフローが確立されている。

## ②専門的キャリア支援組織との連携

### 本学キャリアデザインセンターとの連携による就活キックオフガイダンス

2024 年度は上述した 3 年前期「文芸表現応用Ⅱ」の終了以降、後期が始まる前の 9 月 2 日に 3 年生全員を対象とした「3 年後期キャリアガイダンス」を実施した【資料 2-3-8】。ここでは本学キャリアデザインセンターと文芸表現学科キャリア担当教員の連携・協働によって作成されたガイダンス資料をもとに、3 年生全員に対して、後期から本格的にスタートする就職活動についてのロードマップや留意事項をレクチャーしている。

その後、後期開始以降の 11 月下旬には、本学キャリアデザインセンター主催による学内合同企業説明会【資料 2-3-9】が学内で 3 日間にわたって開催されるため、学科ではそれに先立ち、11 月 20 日に学科キャリア担当教員の主導による「3 年生就活本番直前ガイダンス」を実施した【資料 2-3-10】。このガイダンスでは、9 月の「3 年後期キャリアガイダンス」だけでは就活の動きを活発化させられなかった層に特にリーチすることを意識して、目の前に迫っている学内合同企業説明会への参加促進はもちろん、秋冬以降にインターンシップや実募集を開始している企業へのエントリーを直接的に促すことを目的としている。

### 本学キャリアデザインセンターと学科教職員との連携・協働について

キャリアデザインセンター主導による合同企業説明会や求人募集閲覧会などの各種就活イベントの案内は、毎月のキャリア委員会を通して学科に共有されており、文芸表現学科ではそれらを学科学生の特性に合わせて適宜アレンジして活用している。その他、筆記試験が課せられる企業対策として「マイナビ WEB テスト」の受検を 2 年生・3 年生の必須としており、その結果について、キャリアデザインセンターから学科に共有され、学科会議での検討事項としている。

また、3 年後期の 2 月からは、学科の全教員がそれぞれ担当する 3 年生全員の就活状況（進学準備を含む進路活動全般の状況）を学科に報告。その結果を学科長と学科事務担当の協働で報告書にまとめ、学科 3 年生全員の進路活動状況として、本学キャリアデザインセンターに提出。これによって、必要に応じてキャリアデザインセンター職員から、本学科学生に有益だと見込める

求人情報や就活イベントの情報が共有されるようになり、学科教員はそれらの情報を活用しながら、より精度の高い就活指導を行っている。

こういった学科からキャリアデザインセンターへの月次報告は当該3年生が卒業する翌年度末まで継続され、教員と職員の連携・協働を日常化している。

### (3) 2-3の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

以上が文芸表現学科の教職協働キャリア支援の詳解であるが、この結果として、学科の直近3ヵ年の進路決定率や3年次インターン参加率は以下の通りである。【資料2-3-9】

	23.3卒	24.3卒	25.3卒	26.3卒	学部目標
進路決定率	92.7%	89.7%	100.0%		90%以上
就職率	92.5%	89.2%	100.0%		90%以上
3年次インターンシップ参加率	47.8%	58.1%	46.0%	52.4%	夏 60%以上

表3【資料2-3-9】直近3年\_文芸表現学科進路結果より

このうち進路決定率と就職率を見ると、いずれも学部目標を超えるか、もしくは同等となっており、学科の教職員協働キャリア支援が効果的に機能していることがわかる。

しかし、一方で3年次インターンシップ参加率については、学部目標に達した年はなく、ここに課題が残されているとも考えられる。ただし、3年次インターンシップ参加率ももっとも高かった2024年3月卒業生（58.1%）が、進路決定率（89.7%）においては直近3年でもっとも低いという結果も見逃してはならない。文芸表現学科においては、3年次インターンシップ参加率と進路決定率が単純に結びつかないということにも留意しつつ、この問題を考えたい。

3年次インターンシップ参加率が低いにもかかわらず、進路決定率は高いという結果から考えられることとしては、文芸表現学科の学生は「就活のスタートをきるのが遅い」「エンジンがかかるのが遅い」という傾向が挙げられる。現場の実感としてもその傾向には納得するものがあり、ここを改善することで、より良い進路、すなわち進路の質（進路満足度）の向上につながるという確信があるため、次年度（2026年度）の3年生には、夏期インターンシップ参加率向上を目指した以下の方策を実行する。

その大きな目玉は、2024年から施行された新カリキュラムにおける3年次1クォーター必修キャリア授業「文芸表現発展」の初開講である。これは3年生に夏期インターンシップ参加を強く推進する授業内容となっており、その意味においては、旧カリキュラムの3年次キャリア授業と内容が重なっている。しかし、旧カリキュラムの同授業が前期（4月中旬～7月末）をとおり

て「週1回×14週授業」だったのに対して、次年度の同授業からは3年次1クォーター（4月中旬～5月末）をとおして「100分×2回×7週授業」に濃縮されるという大きなリニューアルポイントがある。

このリニューアルによって、次年度以降の3年生は4月～5月末という早期に必修授業としてインターンシップ参加を目指した動きに取り組むことになるため、必然的に上述した「就活のスタートをきるのが遅い」という問題は改善されるはずである。

#### 基準項目 2-3 エビデンス資料一覧

- 【資料 2-3-1】 2024 年度以降入学生用カリキュラムマップ\_文芸
- 【資料 2-3-2】 2024 年度\_1 年必修「進級研究・制作 1」シラバス
- 【資料 2-3-3】 2024 年度\_1 年次キャリア課題提出状況
- 【資料 2-3-4】 2020 年度～2023 年度入学生用カリキュラムマップ\_文芸
- 【資料 2-3-5】 2024 年度\_2 年前期必修「文芸表現ベーシック II」シラバス
- 【資料 2-3-6】 2024 年度\_2 年後期必修「文芸表現応用 I」シラバス
- 【資料 2-3-7】 2024 年度\_3 年前期必修「文芸表現応用 II」シラバス
- 【資料 2-3-8】 2024 年 9 月 2 日\_3 年後期キャリアガイダンス
- 【資料 2-3-9】 2024 年度\_CDC 主催学内ゴーセツ\_ポスター
- 【資料 2-3-10】 2024 年 11 月 20 日\_3 年生就活本番直前ガイダンス
- 【資料 2-3-11】 直近 3 年\_文芸表現学科進路結果

## 基準項目 2-4 学修環境の整備

- ①学修環境の整備と適切な管理運営、有効活用
- ②安全の確保
- ③図書等の有効活用

### (1) 2-4 の自己判定

基準項目 2-4 を満たしている。

### (2) 2-4 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①学修環境の整備と適切な管理運営、有効活用

文芸表現学科は、その専門領域の特性上、特別な施設・設備を必要としない学科であり、授業についても通常の講義室・演習室以上を必要とする授業はほぼないため、学内でも数少ない専用教室を有しない学科であるが、学生の自習・交流等のためのスペース、プロジェクトルーム（美術工芸学科アートプロデュースコースと共有）、およびゼミ室を保有し、学生の使用に供している。

学生の利用にあたっては使用ルールを定め、每期ガイダンスの際に周知を行っている。またゼミ室には、「百讀ライブラリー」として学科蔵書を配架し、学生への貸出を行っている。「百讀ライブラリー」に収められている図書は、当初は初年次必修科目「百讀」で扱われるものに限定されていたが、現在は「百讀」が1～2年次科目となったことにあわせて、そこで扱う図書、さらには他の授業でとりあげる書籍にまで拡大されている。

授業シラバスに記載された参考図書は図書館に收藏されるが、授業で言及される図書はこれに限定されないため、「百讀ライブラリー」は図書館所蔵の図書を保管する役割を担っている。

#### ②安全の確保

文芸表現学科は施設・設備等の利用にあたって、授業のみならず、正課外における利用に際しても、「学校法人瓜生山学園事業継続計画（BCP）」【資料 2-4-1】や「学校法人瓜生山学園危機管理規程」【資料 2-4-2】などを基本原則としつつ、安全に配慮した指導を適切に行っている。

学生が利用する施設としては上述のゼミ室や学生個人用ロッカーなどがある。利用上のルールについては、前期・後期のはじめに学年ごとに行うガイダンスで適切な利用について周知を図り、実際の利用にあたっては教職員が相談や立ち合いにあたるなどして安全に配慮している。

卒業制作展や学生作品展においては、木工加工や高所での作業など、危険を伴う場面が少なからず存在する。木工作业についてはウルトラファクトリー工房において適切な講習を受講しライセンスを取得した上で、教員立ち合いの下での作業を原則として安全の確保に努めている。

高所作業にあたっては、2023年度に策定された「脚立等の使用時のルール」【資料2-4-3】の厳守を徹底している。2024年度には高所作業用のヘルメットを学科で購入した。

また、事故や災害などに対しては、在学生専用サイトに掲載されている、日頃からの備えを促す資料「命を守る」【資料2-4-4】や、ガイダンス時に学生全員に視聴させる防災訓練用のビデオ教材【資料2-4-5】を通じて注意喚起を行っている。

### ③図書等の有効活用

文芸表現学科は図書関連予算として割り当てられた学科図書費で、教育で必要となる書籍・雑誌等を購入している。なかでも雑誌については、学科の教育上の方針および学生の興味を考慮し、文芸誌を中心に毎年数誌を定期購読している。

書籍については、明文化された選書の指針はないが、上記のとおり、上述の「百讀ライブラリー」と同様、授業でとりあげる書籍を中心に、教員が分担して選書にあっている。学科教育費で賄われる「百讀ライブラリー」は、その対象が文庫等にかぎられているため、文庫本であれば百讀ライブラリーに、それ以外の書籍は図書館に配架という棲み分けがなされており、すでに述べたとおり、両者は相互に補完的な関係にある。

課題点としては、学科図書費の執行率が近年6割程度と停滞しており、今後のより積極的かつ計画的な図書購入が期待される。

### (3) 2-4の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

上述のとおり、学生の学習に必要な環境、蔵書等は必要最低限以上は整ってはいるが、研究室が整備されて以降収容定員が40名（当初の収容定員の3割弱に相当）増加していること、またカリキュラムの改訂にともない学生の自学自習の重要性が増大していることを考えると、共有・自習スペース等の充実は今後の課題といえるだろう。また学科図書予算の円滑な執行、学科全体としての図書収蔵方針の策定、および学生の利用促進も、今後の課題である。

### 基準 2-4 エビデンス資料一覧

【資料2-4-1】学校法人瓜生山学園事業継続計画（BCP）

【資料2-4-2】学校法人瓜生山学園危機管理規程

【資料2-4-3】脚立等の使用時のルール

【資料2-4-4】日頃からの備えを促す資料「命を守る」

【資料2-4-5】防災訓練用のビデオ教材

## 基準 3 教育課程

### 本基準の趣旨

大学の機能の中核である、学修の柱となるのは教育課程（カリキュラム）です。大学は、その使命・目的を踏まえて、教育目標を明確に定めるとともに、これを実現するための方針として3つのポリシーを定めることが求められます。

本学では 2024 年度に教育改革を行い、教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、並びに各学科の「学科の人材養成に関する目的」を改定しました。あらたに「学科ルーブリック」を定め、学部共通のディプロマ・ポリシーに掲げる6つの能力について、学科の専門領域に即して説明し、各学年修了時に発揮されることが期待される能力・行動（到達度）として記述しています。

学部共通のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーは次のとおりです。

### ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

京都芸術大学学士課程は、「藝術立国」を基本使命とし、教育目標に定める社会の変革を牽引することのできる人材の育成を目的として、「人間力」と「創造力」を身につけた学生に学位を授与します。「人間力」はおもに、自立した一人の人間として生きるための「知識・情報収集力」「コミュニケーション力」「倫理観」から成り立っています。「創造力」は、芸術の力を社会に活かすための「論理的思考力」「発想・構想力」「表現力」から成り立っています。

人間力	知識・情報収集力	自分を取りまく人間、社会、自然に対して開かれた好奇心をもち、自身の学修や企画に必要な知識と情報を、主体的かつ体系的に収集し理解することができる
	コミュニケーション力	人間の多様性を理解し、異なる価値観をもつ他者との間に相互理解を形成し、協働することができる
	倫理観	自身の良心と社会の多面的な理解に基づき、社会のために芸術の力を活かすことができる
創造力	論理的思考力	所与の情報をもとに、物事を分析的かつ論理的に考えることができる
	発想・構想力	感性的な直観と理性的な分析や思考から得られた発想を統合し、具体的な研究・制作へと結びつくテーマや仮説として構想することができる
	表現力	テーマや仮説を、適切な媒体・形式によってモノ・コトとして可視化し提示することができる

## カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

京都芸術大学芸術学部は、教育目標およびディプロマ・ポリシーを達成するため、以下の方針に基づきカリキュラムを編成します。

カリキュラムは、学部共通の「芸術教養科目」と学科毎に開設する「専門科目」から構成され、両者が有機的に連動することにより、ディプロマ・ポリシーに定める6つの能力を体系的に修得できるようになっています。芸術教養科目は選択科目を中心に構成され、学生が自らの学修目的に応じて選択できるようになっています。専門科目はコア・カリキュラムとして精選された必修科目を中心に構成されています。

### 芸術教養科目

芸術教養科目は、大学の基本使命である「芸術立国」を理解し、芸術を未来社会に活かすうえで必要なりテラシーを身につけることを目的とした7つの科目群から構成されます。教養としての知識・技術を修得することに加え、さまざまな専門領域を学ぶ学生が協働して取り組むプロジェクト型授業や、専門の垣根を超えて学ぶ副専攻を通じて、領域横断的に学修します。

#### 教養科目群

広く世界や人間を知り、芸術立国の理念を社会で実現するための教養を身につける

#### 芸術科目群

自身の興味に応じて、芸術に関する理解をさらに深める

#### コミュニケーション科目群

芸術を社会につなぎ、多文化共生の礎を創る

#### プロジェクト科目群

学科横断的な環境のなかで、芸術の学びを社会で実践する

#### 日本文化科目群

芸術立国の理念に基づき、国際社会における日本の伝統文化について理解を深める

#### キャリアデザイン科目群

自己と社会に対する理解を深め、自身のキャリア形成を考える

#### 副専攻科目群

領域横断的な学びを通じて、主専攻での学びをさらに発展させる

副専攻は、新しい未来を芸術で切り開き、社会変革を行える人材を育成するため、専門科目（主専攻）での学びを主軸としながら、分野横断での体系的な学びを通じて、さらなる強み（知識・能力）を獲得し、主専攻での学びを応用・活用するために開設するものです。

## 専門科目

専門科目は、専門的な知識や理論、表現方法を、入門・基礎・応用・発展と段階的に身につけ、自身の研究・制作テーマを探求することを目的としたコア・カリキュラムから構成されます。すべての学科で地域社会や産業界と連携した社会実装型授業を導入し、芸術を社会に活かすことを実践的に学びます。各学年末には、それまでに学んだ知識や技術を統合し、高次の能力を発揮することを求める統合科目を設置し、1年を通じての学修到達度を測ります。「卒業研究・制作」において、4年間の学修成果として学位プログラムの達成度を測るとともに、その成果を広く社会に発信します。

## 教育内容・方法

### 初年次教育

芸術教養科目では、とくに「人間力」の基盤を形成し、芸術大学での基本的な学び方を身につけます。学科混成の少人数クラスで課題に挑む「マンデイ・プロジェクト1・2」や、言語的思考を通じて他者の価値観を尊重することを学ぶ「クリエイティブ・プロジェクト」など、これまでの学びを芸術大学での学びへとスムーズに接続するための入門科目を開講します。

専門科目では、とくに「創造力」の基盤を形成し、各専門領域で求められる知識と技術を獲得するための入門・基礎科目や、4年間の学修目標を理解し、自身で学修計画を立て主体的に学ぶための素養・能力を涵養するための入門科目を開講します。

### 進路教育

進路教育は、社会の変革を牽引することのできる人材の育成を教育目標に掲げる本学にとって、きわめて重要な教育です。

芸術教養科目に開設するキャリア科目を通じて、本学での学びと社会の繋がりを理解するとともに、専門科目全体を通じて、自身が学んだ知識や技術を、自らの人生および社会のためにどう活かすかを考えます。また、キャリアデザインセンターが開講する正課外のプログラムや担当教員による定期面談など、きめ細やかな進路支援を行います。

### 教育方法および学修支援

授業の到達目標や評価基準、授業計画、事前・事後学修の内容などはシラバスに明記し、学生に提示します。授業は、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションといったアクティブ・ラーニングを多く取り入れるほか、反転学習を活用し、事前・事後学修の充実を図ることで、学生の主体的学修を促します。

4学期制（クォーター制）や週複数回授業を取り入れるほか、CAP制を設け学生が一度に学修する科目数を制限し、密度の高い学修を実現します。

各学期の始まりには、学生が学修目標や学修計画を立て主体的に学ぶことを支援するために、ガイダンスや担当教員による履修指導面談を実施します。学生は、担当教員とともに、学修管理システム（DPA）を活用して自身の学修状況をふりかえり、学修目標や学修計画を更新していきます。

さらに、一定の要件を満たした学生は、CAP 上限を超えて履修登録が可能となるほか、成績不振学生には専門スタッフが学修アドバイスをを行い、改善を支援します。

### 学修成果

成績評価は、学部共通のガイドラインおよびシラバスに記載する各授業の評価方法・基準に則り厳格に行います。学生自身が到達度を把握できるよう、一部の科目をのぞいてルーブリックを導入します。成績や単位修得状況、GPA、外部試験結果等は DPA を通じて学生に提供し、学生は自身の学修成果をいつでもふりかえり、学修計画に役立てることができます。

芸術教養科目及び専門科目は、本学のディプロマ・ポリシーの達成を目指し、カリキュラム・ポリシーに基づき編成・実施されることが重要です。

本学では 2024 年の教育改革において、卒業要件及び進級要件に GPA 基準を設けました<sup>3</sup>。これは、本学の教育の質を保証するとともに、学生が自らの学修状況を把握し、主体的に学修できるようになることを目指したものです。運用にあたっては、本学が定める「成績評価ガイドライン」<sup>4</sup>に基づき厳正な成績評価を行うとともに、教育課程の編成と実施に反映させることが必要です。

教授方法の開発や学修成果の点検・評価結果のフィードバックを通じて、大学の教育を可視化し、外部からの評価を受けるとともに、さらなる教育課程、教育内容・方法及び学修指導等の改善を不断に行っていくことは、本学の芸術教育の質を高めるために不可欠なことです。

---

### 3 在学生専用サイト

「卒業について」 <https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/2024/grades/graduation.php>

「進級について」 <https://www.kyoto-art.ac.jp/student/teaching/guide/2024/grades/promote.php>

### 4 「京都芸術大学芸術学部成績評価ガイドライン」 (学外秘)

## 基準項目 3-1 単位認定

### ①単位認定基準の周知と厳正な運用

#### (1) 3-1 の自己判定

基準項目 3-1 を満たしている。

#### (2) 3-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

### ①単位認定基準の周知と厳正な運用

#### シラバスに基づいた授業の実施について

本学のシラバスは開講科目ごとに、①授業テーマ、②目的と概要、③学修目標、④到達目標、に加えて、⑤科目ルーブリック（評価方法と基準）、⑥授業計画（授業回数分）を記載する形式となっている。それは専任教員の担当科目、非常勤教員の担当科目、複数人の教員による共担科目の区別なく、どれも記載が義務づけられている。

よって非常勤教員の担当科目は、専任教員によるサポート体制（詳細後述）をとり、学科カリキュラムの意図に沿った授業が計画されるように協力している。学科の2024年度入学生以降のカリキュラム・マップ【資料3-1-1】および2020年度～2023年度入学生用カリキュラムマップ【資料3-1-2】に示されている、各科目に設定された①授業テーマ、②目的と概要、③学修目標、④到達目標が、当該シラバスに記載され、学生はそれらを体系的に理解することができる。

全科目のシラバス公開【資料3-1-3】に際しては、かならず事前にピアチェック（他者のシラバスを査読し、記入漏れなどがなくチェックすること）を履行している。そのうえで、学科長が全体を査読し、カリキュラムに則して学科教育の水準に照らして適切なものとなっているかどうかを確認しているため、シラバスは必要な項目が適切に記載されていると判断できる。

なお、受講学生が各クォーターの授業終了時に回答する、24年度授業改善アンケート【資料3-1-4】によれば、シラバスに関連する問いについて結果は以下である。

Q01：私は授業のシラバスを確認し、到達目標や評価方法・評価基準、事前・事後学修内容、課題について理解していた。

Q06：授業内容はシラバスに記載された目的、到達目標に合致していた。

	1 クォーター		2 クォーター		3 クォーター		4 クォーター	
	Q1	Q6	Q1	Q6	Q1	Q6	Q1	Q6
学部平均	3.49	3.69	3.52	3.62	3.53	3.66	3.51	3.62
学科平均	3.46	3.7	3.53	3.63	3.56	3.68	3.53	3.63

表3【資料3-1-4】2024年度\_授業改善アンケート結果よりシラバス関連設問の平均値

上記の表の2問に関して、学部平均を下回っているのは、1クォーターのQ1のみである。全体としては適切に授業運営が行われており、そのことを学生にも周知できている。

#### 成績評価基準の厳正な運用について

成績評価に関しても同様に、非常勤教員の担当科目はとりわけ重点的に、大学の定める⑤科目ルーブリック（評価方法と基準）に基づいて厳正に運用されているかどうか、サポート教員（詳細後述）がチェックを行なっている。なお、非常勤教員への授業の委任に際しては、授業設計、科目ルーブリックの運用方法、成績評価方法についての解説を行なう研修会を実施し、周知の徹底を目指している。

また、実際の成績評価に関して2024年度の学科科目の成績分布によれば、大学が成績評価ガイドライン【資料3-1-5】として定めるS・A・B・C・D・F分布は以下のようになっている。

<以下、2024年度入学生以降の新カリキュラムにおいて>

- ・1クォーター：S+Aが適正範囲を超過したクラスは5クラス中1クラス
- ・2クォーター：S+Aが適正範囲を超過したクラスは5クラス中1クラス
- ・3クォーター：S+Aが適正範囲を超過したクラスは5クラス中3クラス  
(ただし、そのうち2クラスは受講生5人以下)
- ・4クォーター：S+Aが適正範囲を超過したクラスは5クラス中0クラス

完全にガイドライン通りとはいかない点もあったが、おおむね適正ラインである。

また、欠席超過者の成績評価に関しては、学科内で成績判定会議をクォーターごとに開き、欠席理由に考慮の余地があるか、診断書の有無、出席時のパフォーマンスなどの特別事由については情報共有し、入念に審議をしている。その結果、追加課題等を課すなどをして、学修目標、到達目標と照らして学習成果を確認したのち、単位認定の判定としている。

### (3) 3-1 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

上述のとおり、文芸表現学科の「単位認定基準の周知と厳正な運用」については、「シラバスに基づいた授業の実施」と「成績評価基準の厳正な運用」の両面において、おおむね適切であり、単位の実質化を担保していると言える。

しかし、それでも毎年のように新任教員が非常勤も含めて数多く着任するため、そういった教員については、初年度から学科のカリキュラム・マップや、それに基づいたシラバス作成の意義、また、成績評価のガイドラインに即した成績基準などの理解が及ばない場合もある。

学科の授業を担当する全教員（非常勤教員や他学科教員含む）が、完全に学科カリキュラムを体系的に理解し、シラバスの作成と運用に始まり、それに基づいた授業実施、そして最後の成績評価に至るまでを厳正に遂行していくためには、引き続き学科教員一同によるカリキュラム理解を促進していかなければならない。

そのためには、非常勤教員も含めた全体講師会や学科 FD 研修の実施に加え、各教員間での分科会も適宜実施し、密なコミュニケーションをとりながら授業運営と成績評価に取り組んでいく所存である。

#### 基準項目 3-1 エビデンス資料一覧

【資料 3-1-1】2024 年度以降入学生用カリキュラムマップ\_文芸

【資料 3-2-2】2020 年度～2023 年度入学生用カリキュラムマップ\_文芸

【資料 3-1-3】2024 年度\_文芸表現学科開講全科目シラバス

【資料 3-1-4】2024 年度\_授業改善アンケート結果.xlsx

【資料 3-1-5】京都芸術大学芸術学部成績評価ガイドライン

### 基準項目 3-2 教育課程

- ①ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックの策定と周知
- ②カリキュラム・ポリシーに沿ったカリキュラムの体系的編成
- ③初年次教育
- ④教養教育
- ⑤キャリア教育
- ⑥社会実装教育
- ⑦主体的学修への転換
- ⑧授業形態（講義・演習・実習／対面・遠隔／クラス規模）別の教育方法の工夫・開発
- ⑨教育内容・方法の改善・向上（FD）

#### （1）3-2 の自己判定

基準項目 3-2 を満たしている。

#### （2）3-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

##### ①ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックの策定と周知

文芸表現学科では 2024 年の教育改革において、学科会議における学科教職員全員での協議を重ね、本学ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックを策定した。この学科ルーブリックは本学ウェブサイトにて公示され、周知している。【資料 3-2-1】

また、同ウェブサイトで学科ルーブリックと並んで公示されているカリキュラム・マップ【資料 3-2-2】とカリキュラム・ツリー【資料 3-2-3】は、上記の学科ルーブリックを到達目標として、そこに段階的に向かうことを前提として設計されているため、学科では 2024 年の教育改革が施行される前の 2023 年秋に非常勤教員を含む学科の全教員参加による講師会を開催し、この学科ルーブリックをはじめとする学科カリキュラムの周知と理解を促進した。

その後も、学科では非常勤教員へのカリキュラム理解を促進するため、2024 年度から学科専任教員 1 人につき 5～6 人の非常勤教員をサポートする非常勤教員サポート担当制度を導入【資料 3-2-4】。この制度を導入したことで、隔週で定例化している学科会議に参加しない非常勤教員であっても、学科ルーブリックおよび学科カリキュラムへの理解が深まることとなった。

一方、学生への周知・理解の促進であるが、これについては基準項目 2-2「①主体的学修への転換」の項でも述べたとおり、2024 年度春の新生ガイダンスでの学科ルーブリック発表と、学科長による詳細なレクチャーによって徹底した。今後も各年度の入学時ガイダンスでの発表・説明に加え、2 年生ガイダンスや 3 年生ガイダンスなど、各学年が進級するたびに段階的に確認していく予定である。

## ②カリキュラム・ポリシーに沿ったカリキュラムの体系的編成

文芸表現学科では2024年の教育改革において、本学の教育目標およびディプロマ・ポリシーに基づくカリキュラム・ポリシーに沿って、また、上述した学科ルーブリックを達成することを目的として、学科の教育課程（カリキュラム・マップ）を体系的に編成した。

そのカリキュラム・マップは先述のとおり本学ウェブサイトで公示されているが【資料3-2-2】、主要ポイントを以下に述べる。

### 学科コア科目群（1年1クォーター～3年1クォーターまでの必修5科目連続シリーズ）

すべての文芸表現の土台となる「基礎的なことばの学び」について、「読む、書く、編む、聞く、話す」の5つの側面からアプローチする、言わば文芸表現の基礎教養科目である。

1年次1クォーターの入学早々に開講される「文芸表現入門」をスタート地点として、3年1クォーターまで以下のように段階的に開講される。

#### 1年次1クォーター「文芸表現入門」

文芸表現の導入として、日本語文章の基礎知識と、多様な文芸ジャンルを学ぶ。

#### 1年次3クォーター「文芸表現基礎」

文芸表現の基礎として、日本語文章の専門知識と、すべての文芸表現に通底する「編集的思考・基礎的な文章執筆」を学ぶ。

#### 2年次2クォーター「文芸表現応用1」

文芸表現の多様な学びを応用して、社会との結びつきについて考える。

#### 2年次3クォーター「文芸表現応用2」

文芸表現の学びをさらに応用して、社会に出る意識を醸成する。

#### 3年次1クォーター「文芸表現発展」

文芸表現の学びを発展させて、実際に社会に働きかける。（インターンシップへ）

以上の段階的編成の一連を通して、すべての在学生在が一般的な正しい文章力や、多様な文芸の世界について基礎理解、また調査・取材によって得た情報を適切にまとめる編集力、他者と協働するコミュニケーション力などを総合的に涵養し、その結果として、上述した2年次3クォーター「文芸表現応用2」では社会進出へのレディネス形成、3年次1クォーター「文芸表現発展」では実際に社会に出ること、つまりインターンシップ応募に取り組むという設計になっている。

これはキャリア教育要素を、それだけ抽出して授業化するのではなく、文芸表現の基礎教養的な学びを涵養していくと自然に社会化・社会進出につながるという狙いであり、これを通して学科の教育目標の片翼である「人間力」の育成に到達するのである。

### 百讀科目群（1年1クォーター～2年4クォーターまでの必修・選択4科目連続シリーズ）

1年次1クォーター「百讀1（基礎）」、1年次2クォーター「百讀2（基礎）」、2年次1クォーター「百讀3（応用）」、2年次4クォーター「百讀4（発展）」と段階的に編成されている、文芸作品を読解・鑑賞・解釈する力を涵養するための重要科目である。

百讀1～3までは学年全員が最低限身につけてほしい多様な小説の「読み」、さらにはその小説の歴史的・文化的背景にも着目することに重点を置く必修科目であり、最後の2年次4クォーターの百讀4は「小説を読む」「戯曲・脚本を読む」「ノンフィクションを読む」から選択して履修する発展科目となっている。

### 文芸メソッド科目群（1年4クォーター～2年1クォーターの必修2科目連続シリーズ）

文芸作品を創作するにあたって必要不可欠な技巧や方法論を学ぶ必修の講義科目である。

1年次4クォーターで初開講される「文芸メソッド1」は、文芸表現において「何を」表現するかといった企画論を学ぶためのもので、小説・脚本（戯曲・シナリオ）などフィクションのAクラスと、編集・ノンフィクションのBクラスの2クラスに学生が分かれる。これを1年次の最終クォーターに設置しているのは、これまで我流、あるいは徒手空拳で良くも悪くも自由かつ衝動的に書いてきた作品には限界があることを1年生が痛感し、技巧や方法論の必要性に自覚的になってきた段階だからである。技巧や方法論を切実に求めだした1年生が文芸メソッドを学ぶことに意味があるという狙いで設計されている。

その後、2年次1クォーターの「文芸メソッド2」では、上述の企画論から発展させ、その企画を「いかに」表現するかといった形式論を学ぶための授業として開講される。ここでは小説のAクラス、編集・ノンフィクションのBクラス、戯曲・シナリオのCクラスの3クラスに分かれ、それぞれのジャンルにおける執筆形式や各種表現技巧などの専門的な方法論を学ぶ。

この一連を通して、2年生にして必要な技巧・方法論を修得し、以降は下記の各種ワークショップ科目において、さらに高レベルの文芸創作に取り組んでいくという編成である。

### 文芸創作ワークショップ科目群（1年2クォーター～2年3クォーターの4科目連続シリーズ）

芸術大学に設置されている文芸表現学科としては、ある意味でもっとも重要な科目がワークショップ、すなわち文芸作品を実際に創作する演習科目である。1年次2クォーターにクラス別で初開講され、以降は2年次3クォーターまで下記のように段階的に編成されている。

#### 1年次2クォーター「文芸創作ワークショップ1」（入門編）

1年次最初の演習として、まずはごく短い文芸作品の執筆に取り組む文芸創作の入門授業。1年生が「A小説、B小説、C戯曲・シナリオ、D詩」の4クラスに分かれる。ここでは初心者としての良い意味での衝動的かつ自由でみずみずしい作品の発散を歓迎する。

### 1 年次 3 クォーター「文芸創作ワークショップ 2」（基礎編）

上記の入門編ワークショップを経て、ここでは文芸創作の基礎固めとして、初心者から脱した習作レベルの作品を執筆する。1 年生が「A 小説、B 戯曲・シナリオ、C 編集・取材執筆、D 短歌」の 4 クラスに分かれる。

### 2 年次 2 クォーター「文芸創作ワークショップ 3」（発展編）

上述した 1 年次ワークショップや、その後の文芸メソッド 1～2 を経て、技巧面に自覚的になった 2 年生が、文芸創作の発展編として、独自性のある作品を読者に届くように執筆する。2 年生が「A 小説（エンタメ）、B 小説（純文学）、C 戯曲・シナリオ、D ノンフィクション、E 俳句」の 5 クラスに分かれる。

### 2 年次 3 クォーター「文芸創作ワークショップ 4」（エキスパート編）

2 年次（低年次）最後として、社会に問えるレベルの文芸作品を執筆するエキスパート演習。2 年生が「A 小説（エンタメ）、B 小説（純文学）、C 戯曲・シナリオ、D ノンフィクション」の 4 クラスに分かれ、公募型新人賞や、それに相応する、あるいは準ずる社会的な高いハードルを超えることを目指して作品創作に挑む。

以上の各種創作ワークショップが 2 年次までに段階的に開講され、学生はそれらを履修しながら作品を執筆することで、自分が究めていくべき専門分野を選択。その結果、3 年次以降はジャンル別クラスの「文芸総合演習」に分かれていくという設計である。

### 社会実装「文芸と社会」科目群（2 年 1 クォーター～3 クォーターまでの連続科目シリーズ）

クライアントの要望を文芸表現の力で解決することを目指して、いわゆる社会的な「仕事」に限りなく近いプロジェクトに 2 年生たちが取り組む、実践的な演習授業である。学生は以下の 3 クラスから選択して各プロジェクトに分かれる。

#### 「文芸と社会 1～3」A・StoryVille

文芸的価値があることと一定数の集客が必須となる文芸イベントを学生が企画し、企画が通ると、いざ学生がそのイベントの制作・運営・広報などに取り組む。

#### 「文芸と社会 1～3」B・瓜生通信

本学が発行する広報誌・Web マガジン「瓜生通信」への寄稿。クライアントの本学広報課が求める記事の企画を学生が立案し、企画が通ると、いざ取材・執筆に取り組む。

#### 「文芸と社会 1～3」C・文芸誌 301

一般書店で流通・販売する目的の商業文芸誌 301（サンマルイチ）の企画・編集・制作から、販促・販売・売上管理まで一連の行程に学生が取り組む。

以上の取り組みによって、2年生はこの期間に「社会」「読者」「顧客」という、決して避けて通れないものを強く意識しなければならない。このことが3年次以降、各ゼミに分かれての、さらなる専門性の追求に役立つという狙いである。

### 進級研究・制作科目群（1年4クォーター、2年4クォーター、3年4クォーター）

1年次～3年次まで各4クォーター（最終クォーター）に設置され、この授業の単位を修得することが進級条件となる必修科目である。各年次の1クォーター～3クォーターまでのすべての学びを統合し、学科ルーブリック全項目の各年次到達目標を達成することを目的として、以下の順序で設計されている。

#### 1年次4クォーター「進級研究・制作1」

文芸表現の基礎教養についての統合的講義と、1年次ポートフォリオの作成

#### 2年次4クォーター「進級研究・制作2」

文芸表現・創作についての応用的講義と、2年次ポートフォリオの作成

#### 3年次4クォーター「進級研究・制作3」

作品展のふりかえりと、文芸的キャリア研究の総括的講義・実践

上記のように1～2年次は、その年次における作品集（ポートフォリオ）を制作することが最重要課題となっており、これを完成させないと進級することができない。

一方、3年次「進級研究・制作3」は、この後に述べるゼミに分かれてからの授業となる。文芸表現学科では3年次秋の学園祭時に通称・3年生展と呼ばれる「学生作品展」が開催されるため、そこまでに3年次作品を完成させることが必須となる。よって、この3年次の「進級研究・制作3」は1～2年次のように作品制作だけが主眼ではなく、これまでの学びを経て、いよいよ卒業後の進路についても思考し、行動に移すことが求められるのである。

### 文芸総合演習科目群（3年1クォーター～4年2クォーターまでの連続シリーズ）

低年次カリキュラムを終えた学生が、文芸表現をさらに総合的に学び、その成果として各自の制作・研究を高次のレベルで深めていく、いわゆるゼミに該当する授業が「文芸総合演習（以下、「ゼミ」という。）」である。2023年以前の入学生カリキュラムでは2年次後期～4年前

期にかけて2年間のゼミ授業が実施され、その後4年後期の卒業までの半年間についても、ゼミ教員がゼミ生の進路や作品（卒業制作も含む）について、個別の正課外支援を担当する。

これが2024年の教育改革によって、3年次からゼミが開講される新カリキュラムに変更となった。よって、昨年の2024年度に開講された2年後期～4年前期のゼミは、上記の旧カリキュラムの授業であった。なお、新カリキュラムのゼミが開講するのは2026年度からである。

ただし、ゼミのクラス編成や授業方針、正課外での支援方針自体は上記の旧カリキュラム時代、つまり2024年度開講クラスと変更がないため、まずは以下にそのクラス編成を列記する。

#### 「文芸総合演習」A

文学研究者の教員による小説の創作・研究、または各種評論を専門とするゼミ

#### 「文芸総合演習」B

脚本家・放送作家・小説家の教員による戯曲・脚本、小説の創作を専門とするゼミ

#### 「文芸総合演習」C

出版編集者、詩人、著述家の教員による編集、取材・執筆、ノンフィクション、詩を専門とするゼミ

#### 「文芸総合演習」D

書評家の教員による小説の創作、または文芸批評を専門とするゼミ

#### 「文芸総合演習」E

インタビュアー、ノンフィクション作家の教員による取材・執筆、インタビュー、ノンフィクションを専門とするゼミ

#### 「文芸総合演習」F

小説家の教員による、小説全般の創作を専門とするゼミ

上記のように、文芸表現学科のゼミは、文芸表現における多様なジャンル別に6クラス開講されており、学生一人ひとりが自分の制作・研究したいジャンルと合致するクラスを選択して履修することを可能にしている。なお、小説創作を専門とするゼミが複数あるのは、小説を志向する学生数をもっとも多く、かつ小説のなかでも純文学、エンタメ小説、ライト文芸、ライトノベルと多様なジャンルがあるため、学生が志向する小説ジャンルによってもゼミを選択できるようにしているためである。また、小説ゼミについては、文学研究者が指導するゼミ、書評家が指導するゼミ、小説家が指導するゼミと、担当教員の専門領域によってもアプローチが異なるように設計されており、学生が自身の志向に合わせて選択できる。

履修学生数であるが、1学年が45人前後であるため、原則的にはひとつのゼミにつき、1学年7～8人ずつとなっている。これが2024年度前期は3・4年同時開講、後期は2・3年同時開講であったため、ひとつのゼミにつき、2学年で14～16人ずつを対象に授業が実施された。

文芸表現学科の高年次は、このゼミでの制作・研究が、それぞれの文芸表現を究めていく専門学修の中心となる。また、卒業後の進路についても、このゼミ担当教員がゼミ生一人ひとりと面談や日々の対話を重ね、正課外の時間も活用しながら卒業まで伴走・支援していく。

### 卒業必修科目「卒業研究・制作」（4年後期3クォーター～4クォーター）

低年次から積み上げられてきた上述の各科目を経て、文芸表現学科のカリキュラム・マップにおける最終関門として設置されているのが、卒業するために必修となる授業「卒業研究・制作」（4年次後期3クォーター～4クォーター）である。これは4年次前期2クォーターまで連続開講されてきたゼミを通して執筆された卒業制作の草稿をもとにして、4年生全員が同年次2月に開催される卒業展を成功させるためのプロジェクトを遂行する授業である。

文芸表現学科の卒業展は、例年2月上旬～中旬にかけて9日間にわたって開催される。最大の特徴は、ただの展示会に留まらず、4年生の卒業制作作品（小説、戯曲・脚本、ノンフィクションなどの各種文芸作品）を文庫本として商品化し、一般来場客に向けて販売する、言わば9日間の書店となっているところである。

この卒業展に向けての4年生全員による協働プロジェクトこそが、文芸作品の創作という学科ループリックにおける「創造力」の到達目標だけでなく、それを他者と協働して不特定多数の社会・読者に届けるという、学科ループリックにおける「人間力」の到達目標も満たすものとして設計されている。本項の冒頭で述べた学科ループリックの「創造力」と「人間力」は、この「卒業研究・制作」の必修授業を通して完成するのである。

以上が2024年の教育改革によって策定した文芸表現学科のカリキュラム・マップについての主要解説である。すべての授業科目が学科ループリックの到達目標に段階的に向かっていくように体系的に編成されているのである。

### ③初年次教育

文芸表現学科の初年次教育については、まず前提として入学者の資質・能力とPROGテスト初年次の結果の相関について述べたい。

PROGとは河合塾とリアセックが共同開発したジェネリックスキルの成長を支援するアセスメントプログラムである。専攻・専門にかかわらず、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向=ジェネリックスキルを測定・育成するもので、リテラシーとコンピテンシーの2つの観点から測定し、自身の現状を客観的に把握することを目的としたテストである。本学では2020年度

より1年次と3年次に本テストを受験することを必須としており、この経年の結果を初年次教育～低年次教育の重要資料として活用している。【資料3-2-5】

そんなPROGであるが、2024年度に実施された教職員説明会での「PROG全体傾向報告書\_学科コース別詳細」【資料3-2-6】によると、文芸表現学科の1年生は上記のうちのリテラシー要素である、課題発見力、情報収集力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力のいずれにおいても、私立大学（芸術大）の平均スコアを上回っていた。

そうした文芸表現学科の入学1年生の資質・能力を踏まえ、学科では初年次教育として以下のような高大接続教育のカリキュラムを組んでいる。

初年次教育は高大接続教育でもある。学科では高校の国語科教育で教科目標とされる、①「知識及び技能」、②「思考力、判断力、表現力等」、③「学びに向かう力、人間性等」を、正しい日本語知識を含む文芸表現の基礎教養である、①読む、②書く、③編む、④聞く、⑤話すの各能力と連動させ、それぞれを徹底的に向上させるカリキュラムを初年次に設定した。

基準項目3-2②の体系的カリキュラムの項でも述べたとおり、1年次の必修科目である「文芸表現入門」とその発展形の「文芸表現基礎」では、正しい日本語の運用能力を高めるための基礎的かつ反復的な課題とその添削を徹底する。

同時に、自ら立てた問いを調査・リサーチへと変換し、適切な取材対象者へアプローチする方法を、実践のなかで修得させる。自らの関心事を、社会と結びつけながら体系的に理解し、生の言葉をテキスト化し、それを他者に発信するための編集的思考と基礎的な文章力が必要となる課題に取り組むことで、社会のなかで通用する日本語能力が獲得できる。

次に1年次演習科目である「文芸創作ワークショップ1」「文芸創作ワークショップ2」は、小説、脚本、短詩系など、自身の志向に合わせた文芸ジャンルを選択し、課題作品の執筆に取り組む。これにより自身の関心と感性から得られた発想を統合・編集して作品化する思考力や、企画した作品に必要な専門知識や執筆形式を修得する。また執筆した作品は合評や教員による講評を通じて、改善点を見出し、ブラッシュアップを図ることになる。

また、1年次必修の「百讀1」「百讀2」は教員指定の小説作品の精緻な読解および解釈の言語化、さらにディスカッションおよび発表を通じて、文章表現の技法を正確に理解し、文章読解力（読む力）の基礎を形成する。

最後に2年次への進級要件となる「進級研究・制作1」の単位修得には、上記の「文芸表現入門」「文芸表現基礎」「文芸創作ワークショップ1」「文芸創作ワークショップ2」の成果物の集成として、「1年次ポートフォリオ」の作成が必須となる。文芸ジャンルの多様性を学ぶとともに、今後の自身が極めるジャンルや、研究・制作のヴィジョンを獲得していく。

#### ④教養教育

ディプロマ・ポリシーに掲げる6つの能力の向上には、文芸表現学科による効果的な専門教育と芸術教養センターによる芸術教養科目（いわゆる一般教養科目）の教育との有機的な連動が重

要である。そこで、文芸表現学科では、カリキュラム・ツリー【資料 3-2-3】において、学科で推奨する芸術教養科目を年次ごとに学生に示している。

これによると、初年次では「リーディングスキル」、「アカデミックライティング」、「ことばのワークショップ」など基礎的リテラシーを高める科目に加え、「人権教育」など自己と他者を尊重し合う社会的理念を育む科目を推奨している。

2年次では「現代社会論」や「芸術と人間」「芸術と倫理」など社会における芸術の意義や社会変革の可能性を学ぶ科目とあわせて、自己理解・職業理解を深めて就職活動へのレディネスを涵養する「キャリア研究実践」等の科目を履修推奨している。

3年次では「農演習」「文化人類学」「データサイエンス入門」など、普遍的な人文の智を学ぶ科目に加え、「生涯スポーツ演習」などのウエルビーイングに関わる科目の履修を推奨する。

また全学年に対し、半期ごとの履修ガイダンスを行ない、とくに低年時（1年生、2年生）にはガイダンスに加えて個別の履修登録面談を実施。専門科目および、履修が推奨される教養科目についての相談に応じている。

## ⑤キャリア教育

2024年の教育改革によって策定された文芸表現学科の「人材の養成に関する目的」（基準項目 1-1）を達成するために、学科では体系的に編成されたカリキュラム・マップ、および基準項目 2-3「キャリア支援」で述べた正課内外のキャリア教育・支援に注力し、その結果の進路目標としては、以下の進路パターン目標を設定している。

### 文芸専門職（目標 10%）

作家（小説家・脚本家）、記者、ライター、編集者、書店員、図書館司書といった「書く仕事」「編む仕事」「本を伝える仕事」の専門職。学科定員 45 人のうち、10%にあたる 4～5 人の輩出を目標としている。

### 文芸専門応用職（目標 30%）

広告・印刷・WEB・放送・映画・ゲーム・イベントなど、マスコミおよびエンタメ業界の企業のクリエイティブ系制作職・総合職・プランナー職・PM 職など。学科定員 45 人のうち、30%にあたる 14 人の輩出を目標としている。

### 文芸専門総合職（目標 60%）

上記のほか、業種を特定しない多様な企業における企画営業職・開発職・広報事務職など、本学科で涵養された編集的思考や企画構成力、文章力、ことばの発信力を活かした進路。とりわけ、生活文化、教育、冠婚葬祭、社会福祉法人、各種接客・販売など人間や社会に寄り添う業種。学科定員 45 人のうち、60%にあたる 29 人の輩出を目標としている。

以上の進路パターンを達成するため、2024年に策定した新カリキュラムにおいては、以下の正課キャリア授業を実施する。この完成初年度は2027年度の予定である。

## 1 年次キャリア教育

基準項目 2-3「キャリア支援」で詳述したとおり、昨年の2024年度に実施済みである。

1年次の1クォーター「文芸表現入門」、3クォーター「文芸表現基礎」、4クォーター「進級研究・制作1」の授業を通して、まずは小説家・脚本家・編集者・ライターなど、上記で文芸専門職（10%）に設定している進路についての講義を実施し、それ以降に自身で主体的に調査・研究・実行するための下地をつくった。

## 2 年次キャリア教育

2年次の2クォーター「文芸表現応用1」、3クォーター「文芸表現応用2」、4クォーター「進級研究・制作2」の授業を通して、上記で文芸専門応用職（30%）に設定している出版業界（編集プロダクション含む）、新聞社、広告制作会社（印刷、web、映像など総合広告）、放送・映画の制作会社、ゲーム会社など、マスコミおよびエンタメ業界のクリエイティブ系職種についての講義を実施し、また、学生自らがそれらの業種についての主体的な調査・研究をすることを促進する。

なお、これらの一連科目は今年2025年度から初開講される取り組みであり、昨年の2024年度については、基準項目 2-3「キャリア支援」で述べたとおり、上記授業の前身にあたる旧カリキュラム・マップ【資料 3-1-2】の2年次前期「文芸表現ベーシックⅡ」、2年次後期「文芸表現応用Ⅰ」の一連を通して、同様の取り組みが実施された。

## 3 年次キャリア教育

2024年の教育改革によって策定された新カリキュラムでは、3年次キャリア教育として1クォーターの必修授業「文芸表現発展」が設置されている。これは2026年度に初開講となる科目であるが、内容としては上述した1年次～2年次の文芸専門職（10%）と文芸専門応用職（30%）に加え、文芸専門総合職（60%）についても、学生のキャリア研究を拡充するべく、学生自らが興味・関心のある業種・企業を広くリサーチし、その業種・企業と文芸表現の結ぶつきを考えながら探求する力の涵養を目標としている。

なお、これは昨年の2024年度では、旧カリキュラムの3年次前期「文芸表現応用Ⅱ」の授業内で実施された取り組みであり、この授業を通して3年生たちは夏期休暇以降にインターンシップに参加し、後期から本格化する就職活動へと有機的に展開した。

## 4 年次～卒業まで

4年次以降は正課としてのキャリア授業はなくなり（役目を終え）、各ゼミでの個別キャリア

支援が中心となる。1年次～3年次までの上述した段階的なキャリア教育によって、文芸専門職、文芸専門応用職、文芸専門総合職のそれぞれを志望する学生の自己実現を、4年次からゼミ担当教員が卒業まで根気強く指導・サポートしている。

以上が文芸表現学科の「人材の養成に関する目的」に沿った進路目標パターンと、その目標を達成するたびに正課キャリア教育として段階的に実施されている取り組みである。

この成果と課題については、この後の別項にて詳しく述べることにしたい。

## ⑥社会実装教育

文芸表現学科では基準項目 3-2②の体系的カリキュラム・マップの編成でも述べた社会実装「文芸と社会」科目群（2年1クォーター～3クォーターまでの連続科目）が設置されている。

繰り返しになるが、これはクライアントの要望を文芸表現の力で解決することを目指して、いわゆる社会的な「仕事」に近い以下の3種のプロジェクトに2年生たちが取り組む、実践的な演習授業である。

### 「文芸と社会 1～3」A・StoryVille

文芸的価値があることと一定数の集客が必須となる文芸イベントを学生が企画し、企画が通ると、いざ学生がそのイベントの制作・運営・広報などに取り組む。

### 「文芸と社会 1～3」B・瓜生通信

本学が発行する広報誌・Webマガジン「瓜生通信」への寄稿。クライアントの本学広報課が求める記事の企画を学生が立案し、企画が通ると、いざ取材・執筆に取り組む。

### 「文芸と社会 1～3」C・文芸誌 301

一般書店で流通・販売する目的の商業文芸誌 301（サンマルイチ）の企画・編集・制作から、販促・販売・売上管理まで一連の行程に学生が取り組む。

これを通して学生は「社会」「読者」「顧客」という、決して避けて通れないものを強く意識することを学ぶわけだが、ここからは各クラスの詳細について述べる。

## Storyville（ストーリーヴィル）

文芸イベントの企画・立案・実施遂行・事後フォローを学生主体で行なう。実施例として2024年度は、4月25日に『浅田彰さんが「村上隆 もののけ 京都」展を語る』を開催、130人の聴衆を集めた。6月27日にはギリシア神話研究者の藤村シシン氏を迎えたトークイベントを大垣書店本店にて実施、また11月26日に開催した韓国の人気作家チョン・セラン氏と藤野可織氏

の対談イベントは、K-BOOK フェスティバル実行委員会との共催イベントとして高い注目を集め、新聞社の取材も受けた。

また、これまでに実施された Storyville イベントのアーカイブ化を進め、Storyville 公式 note に集約して社会に公開している。【資料 3-2-7】

### 本学が発行する広報誌・Web マガジン「瓜生通信」

大学広報記事の執筆および編集を実施に行なう。瓜生通信とは、学園のさまざまなアート・デザイン活動を発信するべく、1998 年に創刊された広報誌であり、現在は Web へと移行。精力的に活動を内外に発信している。

本学科の社会実装科目で、その一部の記事を執筆。学生自身がテーマを設定、取材や執筆を個人あるいは数人のチームで行なう。学園生を紹介し掘り下げていく記事などのほかに、学内にとどまらず、京都を代表するアート施設への取材に基づいた記事など、社会的にも意義があり、読者に発信力のある多彩なバリエーションの記事を発表している。

<過去の代表的な公開記事>

- ・瓜生通信「変わり続ける日本伝統」【資料 3-2-8】
- ・瓜生通信「京都の地で芸術を〈前編〉小学校跡地×芸術！？出会い、学び続ける場「京都芸術センター」とは」【資料 3-2-9】

### 学科発の商業文芸誌 301（サンマルイチ）

教員と学生で構成された編集部によって、書店で販売される商業文芸誌を制作する。企画編集会議、リサーチ、取材・執筆、原稿管理について、教員の指導のもと学生主導で行ない、文芸誌の制作だけでなく書店営業・販売・販売までの一連に取り組む。

2024 年 6 月末に発行した「文芸誌 301 第 4 号」【資料 3-2-10】は一穂ミチ氏、高殿円氏など著名な作家への原稿依頼に成功。各方面から大きな話題を呼び、上述した瓜生通信でも取材記事が公開された【資料 3-2-11】。その結果、200 部の雑誌が 1 カ月余りで完売状態となった。

また、この 4 号の学生編集長と副編集長をつとめた学生は、翌年の 4 年次の就職活動で出版社・計 3 社から編集者の内定を得るなど、文芸関連の進路に直結する成果を出した。

翌 2025 年 6 月末に発行した「文芸誌 301 第 5 号」【資料 3-2-12】についても、大特集「はじめての文芸誌」が好評を博し、上述の瓜生通信でも再び特集記事【資料 3-2-13】が公開された。また、芥川賞候補作家・竹中優子氏をはじめ、著名な作家陣による小説・エッセイ・詩等の寄稿も話題を呼んでいる。

## ⑦主体的学修への転換

文芸表現学科の授業形態は大きく講義科目と演習科目に分かれる。

どちらの形態においても、履修学生の主体的な学修態度を引き出すために、担当教員による講評・フィードバックだけでなく、学生間での合評やディスカッション、相互チェックなどを多く取り入れることで、主体的な学修になるよう設計されている。

講義科目では、教員が一方的に講義をするだけでなく、学生間でのディスカッションや事前課題のピアチェック・グループチェックも実施される。演習科目では、授業内で文芸創作をはじめとする各種演習に取り組むだけでなく、事前課題として提出された作品の合評や講評を通して、学生や教員からのフィードバックが行われる。

また、学科コア科目群においては、1年次1クォーター「文芸表現入門」は1学年を約15人ずつの3クラスに分け、続く1年次2クォーター「文芸表現基礎」、2年次2クォーター「文芸表現応用1」は1学年を20人～22人ずつの2クラスに分け、それぞれ異なる教員が同一内容の授業を実施。そうすることで、少人数クラスが実現し、ひとりひとりの学生に対して緻密な個別フィードバックをすることが可能となっている。

授業におけるフィードバックやアクティブ・ラーニング、事前事後学習の充実を重視して、学生に主体的な学修態度を促した結果、2024年度入学生の1年次単位修得率については、上述の「文芸表現入門」が95.6%（46名中、S評価0人、A評価13人、B評価27人、C評価4人、D評価1人、F評価1人）、「文芸表現基礎」が95.5%（44名中、S評価0人、A評価6人、B評価34人、C評価2人、D評価2人、F評価0人）、4クォーター進級科目の「進級研究・制作I」が93.2%（44名中、S評価1人、A評価12人、B評価25人、C評価3人、D評価1人、F評価2人）であり、2024年度入学生46名のうち、2年次進級は40名であった。進級率は86.9%であり、学部目標の93.0%を下回ったことは今後の課題である。

なお、この課題をふまえての改善策として、2025年度以降の入学生には、2週連続して欠席をしたり、2課題連続して提出をしていなかったり、事前事後課題の達成度に問題が見られる学生を早期発見して学科会議等で状況を共有。その後、授業担当教員から当該学生に速やかに声をかけ、適宜面談などによって個別指導を実施している。

また、各授業担当教員だけでなく、日ごろからの学習および学生生活全般の相談役・指導役である担任教員制度も敷いているため、主体的な学修への転換が身につけていないと判断される学生については、日常的なコミュニケーションによって適切な支援を実行している。

## ⑧授業形態（講義・演習・実習／対面・遠隔／クラス規模）別の教育方法の工夫・開発

文芸表現学科 2024年度カリキュラムでは、芸術学部教育課程編成ガイドラインに基づき、初年次から始まる基幹科目「文芸表現基礎」同「入門」、文芸作品の講読を行う「百讀」1～4、文芸創作・編集の方法論を学ぶ「文芸メソッド1・2」、文芸の諸領域をより広く、深く知るための「文芸論」1～7などを、主として教員による講義、教員・学生間での対話をつうじて文芸表

現分野の知識を学修する講義科目として 24 科目、実際の文芸創作に取り組む「文芸創作ワークショップ」1～6、文芸と社会とのつながりを実践的に学ぶ「文芸と社会」1～3などを、学生が創作やディスカッションを通じて総合的に学修する演習科目として 19 科目、また「進級研究・制作」1～3をはじめとし、講義および演習の両方を取り入れた講義+演習科目として 4 科目設置している。また必修科目だけみても講義 20 単位、演習 18 単位と、講義科目、演習科目をバランスよく学修できるよう設定されている。

	全体（単位数）	必修科目のみ（単位数）
講義	24 科目（48 単位）	10 科目（20 単位）
講義+演習	4 科目（12 単位）	3 科目（10 単位）
演習	19 科目（44 単位）	6 科目（18 単位）
合計	47 科目（104 単位）	19 科目（48 単位）

このうち、必修科目（2024 年度開講済の 1 年次科目）については、全体でのディスカッションを重視する「百讀」1・2（それぞれ第 1・2 クォーター）は学年全員（定員 45 名）で 1 クラス、個別の指導、添削、フィードバックが重要となる「文芸表現入門」（第 1 クォーター）では 3 クラス（1 クラス約 15 名）、「文芸表現基礎」（第 3 クォーター）では 2 クラス（1 クラス約 23 名）と段階的にクラスサイズを調節している。

また授業形態別の教育方法の工夫・開発としては、上記「文芸表現入門」、「文芸表現基礎」において、以下のようなことをおこなっている。

- ・講義科目といえども、1 講時 100 分すべてを講義に充ててしまうと学生の集中力が続かなくなる恐れがあるので、適宜学生同士でディスカッションさせて内容を発表させるなど、学生によるアウトプットの時間を設けることで講義内容の定着をはかる。
- ・教員によるレクチャーを受けて、学生は事前事後学修として設定された課題に取り組み、次回の授業内では合評や講評という形でフィードバックを受けることで、インプットとアウトプットが連続して、有機的な繋がりを持ちつつおこなわれる。
- ・緻密なフィードバックが学生ひとりひとりについて必要な単元では、3 クラスまたは 2 クラスに分けて授業をおこなうが、レクチャーによるインプットが中心となる単元では、全クラスをひとつの教室に集めて合同授業をおこなう。

また選択科目ではあるが、ほぼ全員が履修する「文芸創作ワークショップ 1」（1 年、第 2 クォーター）では、①学生が自分が学びたいクラスを履修することができる、②少人数制で学生の

作品への密度の高いフィードバックを行うことができるように、4 クラス体制（小説×2 クラス、脚本×1 クラス、詩×1 クラス）授業を行っている。ここでは、以下のような工夫を施している。

- ・学びたいクラスに学生にエントリーをさせてから、学科教員による審議を経て、最もふさわしいと思われるクラスに振り分ける。ひとクラスは数名から 15 名ほどの少人数。
- ・演習科目であることと、他の科目の内容と有機的に紐づけるために、教員によるレクチャーは最小限度にとどめて、学生の主体性を最大限に引きだして、書きたい作品の傾向など、学生自身の挑戦したいことを尊重しつつ伸ばしていくことを目指す。
- ・クラス全員が同じことをできるようになるのではなく、それぞれの学生がそれぞれに挑戦したいことにおいて、同程度の水準で目標を達成するように導く。
- ・合評や講評においてフィードバックされたことを受けて、学生は同じ作品をリライトして再提出することもある。リライト作品にも丁寧なフィードバックをするので、学生は作品制作における PDCA サイクルを確立させることができるようになる。

一方、1 年次必修の「百讀」1・2 は 45 名強の学生（1 学年分）を 1 クラスとして授業を行っている。本授業の目的と概要、および到達目標は、シラバス上で次の通り定められている。

#### <目的と概要>

高大接続の実践として、一定の評価を得たよく知られた文芸作品を読み、その読みとき方の更新をめざす。作品要約と批評的コメントを繰り返しアウトプットすることで、文章表現の技法や形式上の工夫について正確に理解する力をつける。ディスカッションやプレゼンテーションをつうじて他者と知見を交換しながら、文芸の世界を学んでいくために必要となる文章読解力の基礎を形成する。

#### <到達目標>

文芸表現学科でのすべての学びの礎となる、文章で表現された物語世界を正しく理解する読解の基礎的な力を身につけられる。学修初年度に押さえておくべき、古典的名作も含めた文芸作品を数多く読み、理解できる。

これらを 45 人のクラスで達成するため、この授業では、事前課題として当該回の課題図書を読んでいることを前提とし、200 分（100 分×2 回）の講義時間をいくつかのセクションに分割し、①教員による課題の提示、そのねらいの解説を承けて、個人で課題執筆、②執筆した課題の内容を踏まえて、7～8 人のグループでディスカッション、③各グループの議論の内容を、クラス全体で共有、④教員による解説、まとめ、で構成している。

このような大きいクラスサイズの中にも、個人のワークから、全体での発表、まとめまでを取り入れることにより、授業改善アンケートでも、総合満足度、教員サイドの評価のいずれについ

ても、専門科目平均と同水準あるいはそれ以上の結果を出している。

この工夫については、授業運営、課題の内容、学生へのフィードバックの方法、それらに対する学修成果（出席率、課題の提出率、学生のパフォーマンス等）などを中心に、各期末の学科FD研修で共有・ふりかえりを行い、次期の授業運営、また次年度の授業設計に活かしている。

## ⑨教育内容・方法の改善・向上（FD）

文芸表現学科では、教育内容・方法の組織的な改善・向上を目指して、学科の専任教員がそれぞれ開発した教授方法を学科内で共有することによって全教員の教育力向上を図る「学科FD研修」と「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」を定期的実施している。そこで、2024年度に実施した上記2点について、以下に具体的な実施内容と成果を述べる。

### 学科FD研修について

2024年度の文芸表現学科では、同年の教育改革に伴う新カリキュラムの定着と効果的な運用を目指して、また、学科専任教員全員が、新カリキュラムを体系的に理解し、それに基づいて各授業内容の充実・改善に積極的に取り組むような風土を組織的に構築することを目指して、以下の主要テーマのもと、年4回の学科FD研修を実施した。

- ①新カリキュラムマップに基づく各授業の位置づけや関連性の理解促進
- ②「100分×2回×7週」の授業計画の効果的な運用
- ③事前事後学習の拡充による、密度の濃い主体的学習の促進と定着
- ④演習科目（文芸作品執筆）の授業時間半減による「書く分量と質」についての対策

上記の主要4テーマを念頭におき、各学科FD研修では教員一人ひとりが発表者となり、自身の授業内容について作成資料を用いてプレゼンテーションと質疑応答を実施。研修後はプレゼン資料を学科フォルダに格納し、学科資産とすることを目指した。

なお、各学科FD研修の実施概要は以下の通りである。

#### 【実施概要】

- 1回目「第1クォーターをふりかえって」2024年6月6日（木）11:00～13:00（ZOOM）
- 2回目「第2クォーターをふりかえって」2024年9月17日（火）13:00～15:00（ZOOM）
- 3回目「第3クォーターをふりかえって」2024年11月18日（月）14:00～16:00（ZOOM）
- 4回目「第4クォーターをふりかえって」2025年1月29日（水）15:00～17:00（ZOOM）

上記全4回の学科FD研修を通しての成果については、2024年度末に学科から本学FD委員会に提出した報告資料【資料3-2-14】と、その資料をもとにして、他学科教員向けに作成したサマリーポスター【資料3-2-15】にまとめられているが、要点を列記すると以下である。

- ①新カリキュラムマップに基づく各授業の位置づけや関連性の理解促進
- ②「広く浅い学び」から「狭く深い学び」へ（クォーター制の効果的な活用）
- ③事前事後学習の拡充により、密度の濃い主体的な学修成果を実現
- ④「学習計画モデル」の指示とPDCAサイクルの定着

2024年教育改革の核である「密度の濃い主体的な学修」を定着させるにあたっては、学科の全教員が上記①の新カリキュラムを体系的に理解し、そのうえで②～④を有機的に連関させながら学生教育に取り組んでいくことが重要である。学科FD研修を全4回実施したことで、学科教員の間にその意識が醸成されたことは大きな成果であった。

#### 「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」について

次に「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」であるが、これについてはまず授業改善アンケートについて述べる必要がある。

同アンケートは、各授業の最終回で実施される。各授業の受講生が、当該授業を通しての自身の学修到達度を総括し、かつ当該授業の内容や担当教員の教授法の満足度についての評価も率直に回答するものである。本学ではこのアンケート結果が前期終了後の8月下旬と、後期終了後の2月下旬に各学科に共有されることになっており、各教員は自身が担当する授業のアンケート結果を受けて、まずは個人レベルで担当授業の自己点検を行う。この自己点検の結果については、リフレクション・ノートと呼ばれる本学指定の書式に教員自身が記入し、期日までに学科長に提出するものである。

文芸表現学科では、非常勤教員を含む全教員からのリフレクション・ノート提出を受け、その後には次の段階である学科組織レベルでの授業改善活動を実施。具体的には例年9月と3月に実施される同活動を目的とした臨時学科会議がそれにあたる。

2024年9月17日と、2025年3月17日に文芸表現学科で実施した組織レベルでの「授業改善・点検評価」の臨時会議では、当該期間の授業改善アンケートの結果一覧と、それを受けて全教員から提出されたリフレクション・ノートの内容を共有し、顕著な成果を挙げた授業の内容を全教員が今後の参考にすることに加え、一方で問題点のあった授業については、今後の改善を目的とした生産的議論をおこなった。

この結果については、2024年9月30日と2025年3月31日に本学FD委員会に提出された「授業点検・評価報告書」【前期資料3-2-16、後期資料3-2-17】を参照されたい。

## 地域社会・産業界・関連団体等からの意見の活用について

地域社会・産業界・関連団体等からの意見を授業内容や教育方法の改善に活用している代表的な事例としては、上述した学科の社会実装科目「文芸と社会」における商業文芸誌301の編集・制作・販売の取り組みが挙げられる。

この授業では一般書店で販売する文芸誌を教員と履修学生の協働で制作するにあたって、同誌の販売委託先にあたる京都市内のいくつかの書店を教員と学生で訪問し、事前営業活動の一環として雑誌内容についてのプレゼンテーションを実施した。そのなかで、書店側からさまざまな意見をいただき、それを制作に活かしてきた。その主たるところは以下である。

- ①大手文芸誌とは異なる、リトルプレスならではの魅力ある文芸誌にしてほしい。
- ②いわゆる同人誌とは異なる商業的な文芸誌でありながら、大学発行の文芸誌としての社会的意義も重視してほしい
- ③昨今の文芸誌の厳しい販売状況と照らして、それを打開するアイデアを求めたい
- ④現役大学生という若い感性を活かして、ネクストブレイクする作家の発掘を求めたい

その結果、繰り返しになるが、2024年6月30日刊行の文芸誌301第4号【資料3-2-10】では、各書店から出された上記の意見や課題を解決することも念頭に置いて、履修学生の協働によって編集・制作された。

とくに上記④の「現役大学生という若い感性を活かして、ネクストブレイクする作家の発掘を求めたい」という意見については、履修学生が試行錯誤を繰り返して、さまざまな作家による寄稿や対談、インタビュー企画が実現【資料3-2-11】。そのなかの一人で、書き下ろし小説を寄稿してくださった小説家の一穂ミチ氏については、同誌発売直後の7月中旬に2024年度上半期の直木三十五賞を受賞したという大きなニュースが発表され、編集部が騒然となった。その効果もあって、同誌の販売を委託していた京都市内の各書店から「売り切れ」の報告が相次ぎ、文芸誌301第4号は初版部数（200部）完売の成果を挙げたのである。

このように、商業文芸誌の編集・制作・販売に取り組む授業を実施するにあたって、各書店からの意見を活用することは、本学科の社会実装教育に大きく寄与している。

### (3) 3-2の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取り組み予定）

基準項目3-2「教育課程」において、さまざまな観点から学科の自己点検を行ってきたが、それを受けて今後の課題であると考えられるのは、観点③の「初年次教育」である。2024年度入学生（46人）から上述した初年度教育を経て、離籍者3人、進級不可者3人を出したという、この結果については、学科として重く受け止めている。

まず離籍者3人については入学時、あるいは入学早々から本学科のカリキュラムとのミスマッチが生じ、その結果、他大学を受験し直すという決断をした。

また、進級不可者3人については、うち2人は出席は足りているが課題提出ができておらず進級要件を満たせなかった学生で、残る1人は心身の問題により通学が困難で、後期中から不登校が目立っていた学生であった。この3人のケースについては、学科とのミスマッチではないと判断できるため、学修の状況をなるべく早期に把握し、担当教員を中心とした学修サポートを充実させていくことで改善できると考えている。

総じて、今後の向上方策としては、学生募集及び入試時点からの学科の特色とカリキュラムの訴求力拡充によりミスマッチを防ぐこと、かつ入学後は通学困難や課題提出困難などの問題を早期発見し、課題解決に向けて学科一丸となって組織的に取り組んでいく所存である。

### 基準項目 3-2 エビデンス資料一覧

【資料 3-2-1】 2024 年度\_学科ループリック

【資料 3-2-2】 2024 年度以降入学生用カリキュラムマップ\_文芸

【資料 3-2-3】 2024 年度\_カリキュラム・ツリー

【資料 3-2-4】 2024 年度\_非常勤教員サポート担当割

【資料 3-2-5】 PROG テストについて

【資料 3-2-6】 2024\_教職員説明会資料 (PROG 全体傾向報告書\_学科コース別詳細)

【資料 3-2-7】 Storyville\_note

【資料 3-2-8】 瓜生通信「変わり続ける日本伝統」

【資料 3-2-9】 瓜生通信「京都の地で芸術を〈前編〉 小学校跡地×芸術！？ 出会い、学び続ける場「京都芸術センター」とは」

【資料 3-2-10】 文芸誌 301 第 4 号ニュースリリース

【資料 3-2-11】 芸大生がつくる商業文芸誌「301」第 4 号、大幅リニューアルで販売中！

【資料 3-2-12】 文芸表現学科発の「文芸誌 301」第 5 号 (301 文庫) 発行！

【資料 3-2-13】 芸大生がつくる商業文芸誌「301」第 5 号が完成！ — 「文芸誌って意外とやわらかい」を届けたい

【資料 3-2-14】 2024 年度\_文芸表現学科 FD 研修報告書

【資料 3-2-15】 2024 年度\_全学 FD 研修文芸表現学科ポスター

【資料 3-2-16】 2024 年度前期\_授業点検・評価報告書 (文芸表現学科)

【資料 3-2-17】 2024 年度後期\_授業点検・評価報告書 (文芸表現学科)

### 基準項目 3-3 教員・職員

- ①教育研究上の目的及び教育課程に即した教員の確保と配置
- ②非常勤教員との連携
- ③教職協働
- ④教職員の職能開発

#### (1) 3-3 の自己判定

基準項目 3-3 を満たしている。

#### (2) 3-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①教育研究上の目的及び教育課程に即した教員の確保と配置

文芸表現学科では基準 1-1 で示した「人材の養成に関する目的」や「学科教育目標」を達成するため、本学カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程（カリキュラム・マップ）を体系的に編成していることを基準項目 3-2「教育課程」で述べた。また、その一連において、以下の 3 領域を学科教育の主要ジャンルとして位置づけ、そのことが昨今の時代の変化に対応した学科の特色・個性となっていることは、基準項目 1-1 ですでに確認済みである。

- ①小説の研究・創作～小説家の育成
- ②広義の編集的思考・記事執筆力の涵養～編集者・ライターへの育成
- ③戯曲・脚本の研究・創作～脚本家（シナリオライター）への育成

#### 専任教員（常勤教員）の確保と配置について

以上を前提・目的として、まずは学科の専任教員（常勤教員）の確保と配置について、2025 年度の学科「教育計画・学科目標」の教員体制【資料 3-3-1】をもとに以下に詳述する。

2025 年現在の学科専任教員（常勤教員）6 人の専門領域であるが、実作者（作家）としての側面から小説・戯曲・脚本の主に授業を担当する教員が 2 人、文学研究や文芸批評の側面から小説の授業を主に担当する教員が 2 人おり、編集者・ライター（ノンフィクション含む）の領域については、実務家（1 人）と文学研究者（1 人）の両面から、それに該当する各授業を担当。このようにして、学科の主要 3 領域（小説、編集者・ライター、戯曲・脚本）に即した専任教員を、実務家と研究者の両面で確保・配置している。

また、この専任教員 6 人は基準 3-2「教育課程」で述べた「文芸総合演習」の授業において、それぞれの専門領域に即したクラスを担当する。よって、学科では高年次にさしかかった学生がより専門性を究めるゼミの履修をするにあたって、自ら志望する専門領域を定め、その領域にあったゼミのクラスを選択する。このことは、上述した教育課程に即した担当教員の配置について、それを効果的に運用するための学科施策である。

人数としては小説を専門とする教員（4人）がもっとも多く、実作者・研究者・批評家とバリエーションも豊富であり、一見偏りがあるが、これは在学生（190人）のなかで小説を志向する学生がボリュームゾーンであり、教育課程においても中核となるためである。

以下の表は2025年度前期の「文芸総合演習」6クラスそれぞれの専門領域と履修学生数であるが、これを見ると各クラスの履修人数の合計は15人～18人であり、その意味では大きな偏りはなく、現在の文芸表現学科の専任教員6人のバランスが適正であることがわかる。

なお、「文芸総合演習」Eクラスのみ極端に人数が少ないが、これは2025年度に専任教員の交代があったため、その前年の2024年度に新規学年のクラスを開講せず、前任教員のゼミの履修生を引き継ぐだけに留めたからである。

クラス	担当教員	専門領域	4年	3年	計
文芸総合演習 A	河田学 中村淳平	小説・評論	8人	9人	<b>17人</b>
文芸総合演習 B	山田隆道	戯曲・脚本、小説	6人	12人	<b>18人</b>
文芸総合演習 C	中村純	編集・取材記事・ 詩	5人	10人	<b>15人</b>
文芸総合演習 D	江南亜美子	小説・文芸批評	5人	10人	<b>15人</b>
文芸総合演習 E	阪本佳郎	ノンフィクション	5人	1人	<b>6人</b>
文芸総合演習 F	仙田学	小説	9人	9人	<b>18人</b>

上記の専任教員6人による各ゼミの担当業務には、単にそれぞれの専門領域に即したゼミの授業を実施するというだけでなく、各ゼミ生の個別作品指導（卒業制作含む）や進路指導など、卒業までの日常的な学習支援全般も含まれる。

#### 非常勤教員（客員教授・非常勤講師）の採用と配置について

次に各授業を担当する非常勤教員（客員教授・非常勤講師）の採用と配置についてある。

まずは客員教授の任用基準であるが、専門領域における顕著な業績・実績があることに加え、学科の中長期的なビジョンに沿った正課外の学生支援においても重要な役割を期待できる教員としている。その点、文芸表現学科で採用している3人の客員教授【資料3-3-2】は豊富な実務実績や経験を活かして、長年にわたって学科の教育・学生支援に大きく寄与されている。

次に非常勤講師についてであるが、文芸表現学科では基準項目 3-2「教育課程」で述べた学科教育目標と教育課程（カリキュラム・マップ）を効果的に達成するために、専任教員（常勤教員）だけでは足りない分野・領域の授業担当として、それぞれの授業に即した領域を専門とする非常勤講師を適切に採用している【資料 3-3-2】。

こうすることによって、上述した学科の主要 3 領域だけでなく、「詩・短歌・俳句」「校正・校閲」「図書館学」「ゲームデザイン・シナリオ」「各種グラフィックデザイン」「web・映像などマルチメディアデザイン」「装丁」「アナウンス」「落語・講談」など多様な周辺領域に派生した広範なカリキュラム・マップを具現化している。

非常勤教員の採用基準については、カリキュラム・マップに即した当該授業を指導するにあたって、その専門領域についての十分な学識・研究業績、または実務経験・実績、または本学の内外を問わず高等教育機関での十分な指導実績があること、かつ学科教育目標とカリキュラム・マップについての積極的な理解があることが挙げられる。また、非常勤教員を採用する際は、その必要が生じたときに、学科長から学科会議等の議題として教職員全員に共有され、その後に各教職員から上述した基準をもとに候補者の推薦が学科長に寄せられ、適宜学科内での審議を経て、最終的には学科長が決裁するというフローである。

## ②非常勤教員との連携

次に学科教職員（専任教員・常勤職員）と非常勤教員との連携についてである。

まずは 2024 年の教育改革における全学的な教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、また、それに伴う文芸表現学科の学科教育目標、学科ルーブリック、カリキュラム・マップについては、基準項目 3-2「教育課程」の「①ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックの策定と周知」の項でも述べたとおり、それが施行される前年の 2023 年 11 月に実施した文芸表現学科講師会にて学科長から共有・説明がなされた。この講師会はすべての専任教員および非常勤教員に参加を呼びかけ、本学で対面開催したものだが、一部スケジュールの都合でどうしても参加がかなわなかった非常勤教員については、同講師会の模様を完全動画収録したデータを後日共有することで、この周知を徹底した。

それだけでなく、学科では非常勤教員も含めた組織的な教育活動を実行するため、また、学科教職員と非常勤教員の連携を強化するため、これも基準項目 3-2「教育課程」の「①ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックの策定と周知」の項でも述べた非常勤教員サポート担当制【資料 3-2-4】を導入。これは非常勤教員のシラバス作成時から、サポート担当の専任教員が学科教育目標、学科ルーブリック、カリキュラム・マップに基づく授業計画の策定を補助する制度であり、シラバス作成後も授業開始前～授業期間～授業終了後の各行程において、担当の専任教員が非常勤講師の授業を適宜サポートしている。

また、授業終了後は基準項目 3-2「教育課程」の「⑨教育内容・方法の改善・向上」で述べた、授業改善アンケートの結果をもとにした「リフレクション・ノート」に非常勤教員も記入し、サポート担当の専任教員との協議によって個人レベルでの授業改善活動をおこなう。

その後の「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」については、非常勤教員の参加は必須ではないもの、非常勤教員の担当授業に改善事案があった場合は、サポート担当の専任教員を中心に改善策を協議し、その結果を非常勤教員にフィードバックしながら、次年度シラバスの作成時から改善活動を実行している。

なお、2024 年度のその結果については、同年の「授業点検・評価報告書」【前期資料 3-2-16、後期資料 3-2-17】に詳述されているため、参照されたい。

### ③教職協働（教職員が協働し、学科運営を行っているか）

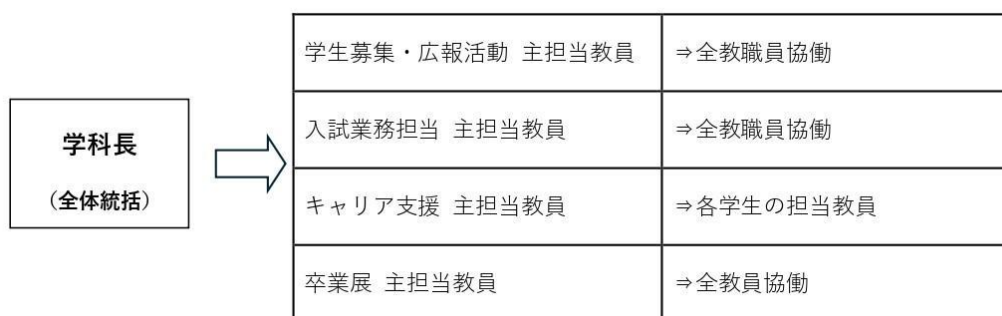
学科運営を遂行する教職員は学科長をはじめとする専任教員 6 人、業務担当非常勤教員 1 人、学科事務を担当する職員 1 人、学科事務の副手を担当する職員 1 人の計 9 人である。

また、年間の学科運営業務は多岐にわたるが、主たるものとしては以下に分類される。

- ①学生募集・学科広報
- ②入試業務
- ③学科教育「正課外も含めたカリキュラム全体の進行管理・統括」
- ④学生支援「キャリア支援」
- ⑤卒業制作・卒業展

上記 5 種の学科運営業務だが、すべては学科長の指令・統括のもと、学科専任教員（常勤教員）で役割分担をして【資料 3-3-3】、教職員協働で遂行されている。

この各教員の役割は主担当（統括担当）という位置づけであり、その教員が担当業務のすべてを遂行するという性質のものではない。原則として学生募集活動（オープンキャンパスや体験授業など）、学科広報活動（ブログや SNS 更新、DM 配布など）、入試業務、キャリア支援、卒業展などの重要な学科運営業務は、以下の図のように、学科長の全体統括のもと、それぞれの運営部門の主担当教員が中心、あるいは牽引役となっており、そこに全教員が適宜シフト制を活用しながら協働するものとしている。



また、学科運營業務には上述したように学科事務を担当する職員（1人）と、学科事務の副手を担当する職員1人も大きく関与する。

なかでも学科事務担当は、学科事務全般の責任者の立場として、常に学科長と協働しながら、上述した全学科運營業務の事務的な側面（連絡窓口対応、学生サポート、資料準備、オープンキャンパスや体験授業のサポートなど）を担当する。その他、学科の予算管理や備品管理、開講計画の進行管理、次年度教育計画の一部における学科長との協働作業など、多岐にわたる。

その際、学科事務担当の補佐的な役割を担うのが副手担当の職員（1人）である。この学科事務担当と副手の協働によって、文芸表現学科の学科運営は支えられている。

#### ④教職員の職能開発

文芸表現学科の教員は、本学 FD 委員会による全学的な FD 研修や SD 研修にも積極的に参加し、それぞれの職能開発にも尽力している。2024 年に実施された FD/SD 研修についての文芸表現学科教員の出席回数は、最多の教員で 11 回、最少の教員で 5 回であった【資料 3-3-4】。最多の 11 回に参加した教員は本学教員歴がもっとも浅いため、なるべく多くの研修に参加するよう学科として推奨したという背景がある。

また、学科教員の職能開発における顕著な成果であるが、本学には授業改善アンケートの結果をもとにして、すぐれた授業を実施している教員を部門ごとに選出して顕彰する、全学教員を対象とした「教員顕彰」の制度があり、その 2023 年度の新人教員部門【資料 3-3-5】と、2024 年度の専門 1 年生科目部門【資料 3-3-6】において、それぞれ文芸表現学科の教員が顕彰された。

これは学科教員の近年の職能開発活動が大きな成果として結びついた証左であり、これを励みにして今後も学科教員全員が職能開発向上に尽力する所存である。

### (3) 3-3 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

基準項目 3-3「教員・職員」について点検してきた結果、今後の課題として受け止めているのは非常勤教員についての学科カリキュラム理解と成績基準のガイドライン理解である。

非常勤教員はその担当業務の特性上（授業を個別担当する）、自分の担当授業が学科カリキュラムの体系のなかでどう位置付けられており、前後にどんな文脈があるのか、などといった担当授業についての相対的理解がどうしても難しくなってくる。そのため、学科では上述したとおり、専任教員によるサポート担当制を導入しているのだが、昨年の 2024 年度は導入初年度だったため、理解促進がまだまだ不十分なところがあった。

また、成績基準のガイドラインについても、とくに S 評価（90 点以上）と A 評価（80 点以上）の学生数を適正範囲内におさめるということに抵抗する非常勤教員も一部にいた。いわく、「優秀だった学生はみんな A 以上の評価で良いのではないか。無理に点数を下げるのはいかなものか」といった類の意見である。しかし、このガイドラインは成績評価が適正になるような授業設計と課題設定を構築するという意味であり、言わば試験難易度の調整である。ガイドラインに即した難易度の試験問題を作成する、あるいは課題を設定することが求められているのであって、成績採点段階でガイドラインをあまりに超過した場合は、次年度から授業の難易度をシラバス作成段階から改善する必要がある。

そのあたりの基本理解がまだ不十分な非常勤教員も一部にいるため、上述した学科カリキュラム・マップの理解とともに、今後の改善方策として、学科 FD 研修への非常勤教員への参加呼びかけや、非常勤教員のサポート担当制の強化を徹底していく所存である。

#### 基準項目 3-3 エビデンス資料一覧

【資料 3-3-1】2025 年度\_文芸表現学科教員体制（教育計画・学科目標より）

【資料 3-3-2】2025 年度\_文芸表現学科\_客員教授・非常勤講師\_一覧

【資料 3-3-3】学科運営業務担当表

【資料 3-3-4】2024 年度 FD/SD 研修出欠記録

【資料 3-3-5】2023 年度\_教員顕彰者

【資料 3-3-6】2024 年度\_教員顕彰者

## 基準 4 学修成果

### 本基準の趣旨

大学は、教育目標を達成するために、ディプロマ・ポリシーを定め、どのような能力を身につければ学位を授与するかを公表しなければなりません。また、大学の教育活動を、教育目標に則して適切に評価し、ディプロマ・ポリシーの見直しを含む教育改善につなげるためにも、学修成果を適切に把握・可視化することが必要です。また、学修者本位の教育の観点から、一人一人の学生が自らの学修成果として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることも重要になります。

本学の教育目標は、「人類が直面する困難な課題を克服するために、自らの「人間力」と「創造力」を鍛え、社会の変革を牽引することのできる人材を育成する。」と定めています。卒業時に身につけるべき能力を、「人間力（知識・情報収集力、コミュニケーション力、倫理観）」と「創造力（論理的思考力、発想・構想力、表現力）」としていますが、「社会の変革を牽引することのできる人材を育成」とあるように、卒業生が社会でいかに活躍しているか、その影響も踏まえ検証することが重要です。

本学では、学修成果を点検・評価し、教育目標及び教育研究活動等の諸活動の改善に繋げるため、次のとおりアセスメント・ポリシーを定めています。

### アセスメント・ポリシー

#### 基本方針

- 1) 京都芸術大学芸術学部では、ディプロマ・ポリシーに明示した学生の学修成果を測定・把握し、学生自身が大学での学びを通じて得られた学修成果を説明できるようになること、及び本学が行う教育プログラムの検証と改善を目的に、以下の方針に基づき学修成果の評価を行います。
- 2) 入学時、在学時、卒業時のそれぞれにおいて学修成果を測定し、3 つの方針の達成状況を評価します。  
入学時：アドミッション・ポリシーで明示する資質・能力を備えた学生を確保できているか  
在学時：カリキュラム・ポリシーに沿った教育活動の実施により、教育成果が得られているか  
卒業時：ディプロマ・ポリシーに定める学修成果が達成されているか
- 3) 学修成果の評価にあたっては、成績評価（GPA）を重要指標と定め、進路結果や他のアセスメント指標と組み合わせて、総合的かつ多面的に評価を行うものとします。
- 4) 内部質保証ポリシーに基づき、学生レベル、授業科目レベル、プログラムレベルで学修成果の評価を行い、学生の学修成果の向上と教育活動の改善を目指し、組織的且つ恒常的に取り組みます。

- 5) 未来社会に向け、本学が掲げる教育目標をより高い水準で達成するために、学科別カリキュラム評価（外部評価）や卒業生アンケート、企業アンケートを実施し、社会からの意見を幅広く取り入れ、本学の教育活動の改善に活用します。
- 6) 具体的なアセスメントの実施および活用の方法については、アセスメント・プランに定めま

### 芸術学部 アセスメント指標

	入学前／入学時 アドミッション・ポリシー APで示す通りの資質・能力を備えた学生を確保できているか	在学中 カリキュラム・ポリシー CPに沿った教育活動の実施により、教育効果が得られているか	卒業時／卒業後 ディプロマ・ポリシー DPに定める学修成果が達成されているか
<b>大学機関レベル</b> 学修成果の達成状況を総合的に評価する	自己点検・評価	自己点検・評価 学生生活・学習アンケート	自己点検・評価 卒業時アンケート 卒業生アンケート 企業アンケート
<b>プログラムレベル</b> 成績評価や進路状況・結果のほか、多角的な指標を用いて、教育課程全体を通じた学修成果の達成状況について評価する	学科別カリキュラム評価 入学試験 入学時アンケート 留学生数 アセスメントテスト	学科別カリキュラム評価 成績分布 単位修得状況 GPA 出席状況 離籍率 進級率 副専攻修了者数 社会実装教育（PBL）の開講数・単位修得者数 授業改善アンケート 学生参画型FD研修 学生生活・学習アンケート アセスメントテスト インターンシップ参加率 海外派遣学生数	学科別カリキュラム評価 進路決定率 卒業率 学位授与数 資格・免許等取得状況 早期内定率 正規雇用率 就職先分布状況 卒業時アンケート
<b>授業科目レベル</b> 成績評価および授業改善アンケートの結果等から、授業科目ごとの学修成果の達成状況を評価する		成績分布 単位修得状況 GPA 出席状況 授業改善アンケート 学生参画型FD研修	
<b>学生レベル</b> 学生毎の学修成果の達成状況を評価し、学修指導に活用する学生は、DPAシステムから自身の学修成果をふりかえり、次期の学修計画に活用する	アセスメントテスト	成績分布 単位修得状況 GPA 出席状況 授業改善アンケート アセスメントテスト インターンシップ参加率	成績 進路状況

#### 基準項目 4-1 在学中～卒業時

- ①カリキュラムの各段階に応じた学修到達度
- ②「卒業研究・制作」の成果
- ③「人材の養成に関する目的」に対する達成状況
- ④学生満足度（進路満足度・総合満足度・推奨意向）

##### (1) 4-1 の自己判定

基準項目 4-1 を満たしている。

##### (2) 4-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①カリキュラムの各段階に応じた学修到達度

カリキュラムの各段階に応じた学修到達度をはかるために、2024 年度新カリキュラムでは 1 年次から 3 年次までの各最終クォーター（4 クォーター）に必修科目「進級研究・制作」を開講している。

いずれの学年においても、学生は 1 クォーター～3 クォーターの各科目を通して、正しい日本語知識と文芸表現の基礎教養、自身のテーマ・関心事への体系的な理解、ジャンル特性に応じた専門的技術を修得し、それらを適切に運用して文芸作品をつくりあげてきた。そうした作品を自ら批評的に点検し、ブラッシュアップさせ、各年次ポートフォリオに集約することで 1 年次の学びを統合させることが、この「進級研究・制作」のシラバスに設定された学修目標となる。【資料 4-1-1】

このポートフォリオの課題要項については、作品を自身の所有物であるとの考えから、読者に広く受け入れられるための（publicus／公の）出版物であるという意識へと変換させる、さまざまな観点が盛り込まれる【資料 4-1-2】。複数の自作を組み合わせ、コンセプトを言語化し、見せるためのデザインを工夫するなど、編集的思考も必要とされる課題となっている。

このポートフォリオの作成を通じて、それまでの研究・制作活動をふりかえり、今後さらに深く追求していきたい文芸の作品ジャンル（小説、戯曲・脚本、ノンフィクション、評論など）について自己分析を進め、今後のヴィジョンを獲得することになる。

上記にあわせ、1 年次からの段階的な業界・職種研究を進めるのも「進級研究・制作」の大きな眼目だ。1 年次では「小説家・脚本家・ライター・編集者」についてのキャリアの理解を深める。2 年次では、文芸専門総合職（編集的思考、企画構成力を活かした仕事）と位置づける一般企業における「企画営業職」「企画開発職」「広報事務職」、また人文的な智を広範に活用する「教育・福祉・冠婚葬祭・各種接客・販売」関連職に関する幅広い知識獲得を目指している。

また 2 年次の「進級研究・制作」が、例年 11 月に開催される 3 年生主体の「学生作品展」に向けた準備となり、また、そこでの自己分析がゼミ選択のための材料となる。

## ②「卒業研究・制作」の成果

### 卒業制作について

学科の掲げる教育目標が、卒業制作の到達目標となる。基準項目 1-1 の再掲になるが、あらためて学科教育目標を以下に引用する。

#### 【学科教育目標】

「ことば」に関する実践的かつ理論的な学びをつうじて、人間と社会を常に俯瞰的かつ批評的に見つめ、新しい言語表現を追及する創造力と、異なる価値観をもった他者とのたゆまぬコミュニケーションと協働によって、文芸と社会をつないでいく人間力を身につけます。これら二つの力をもとに、ことばの力で社会を編み直し、社会に新しい価値を生み出すことのできる人材を育成します。

よって「卒業研究・制作」では、4年間の学びを通じて身に着けた人間力と想像力を存分に発揮した、社会的意義を持つ文芸作品の作成が必須となる。学生はゼミの担当教員との面談を経て自身の制作のジャンルを選択し、4月に計画書提出。以降、7月末の作品中間提出を経て、9月に卒制草稿を提出し、口頭試問を受ける。その後、約1カ月のブラッシュアップの期間を経て、完成稿を提出。全卒業制作が掲載される作品集「Littera（リッテラ）」や、文庫本を作成する。

卒業制作の設定されたジャンルと、その規定枚数は以下の通りである。

【小説】原稿用紙換算 100 枚以上、200 枚以下

【戯曲】原稿用紙換算 100 枚以上、120 枚以下

【映画脚本】原稿用紙換算 100 枚以上、120 枚以下

【評論】原稿用紙換算 50 枚以上、100 枚以下

【エッセイ】原稿用紙換算 50 枚以上、100 枚以下

【取材、調査等をもとにしたノンフィクション】原稿用紙換算 100 枚以上、200 枚以下

【その他】原稿用紙換算 100 枚以上、200 枚以下

### 卒業制作の審査について

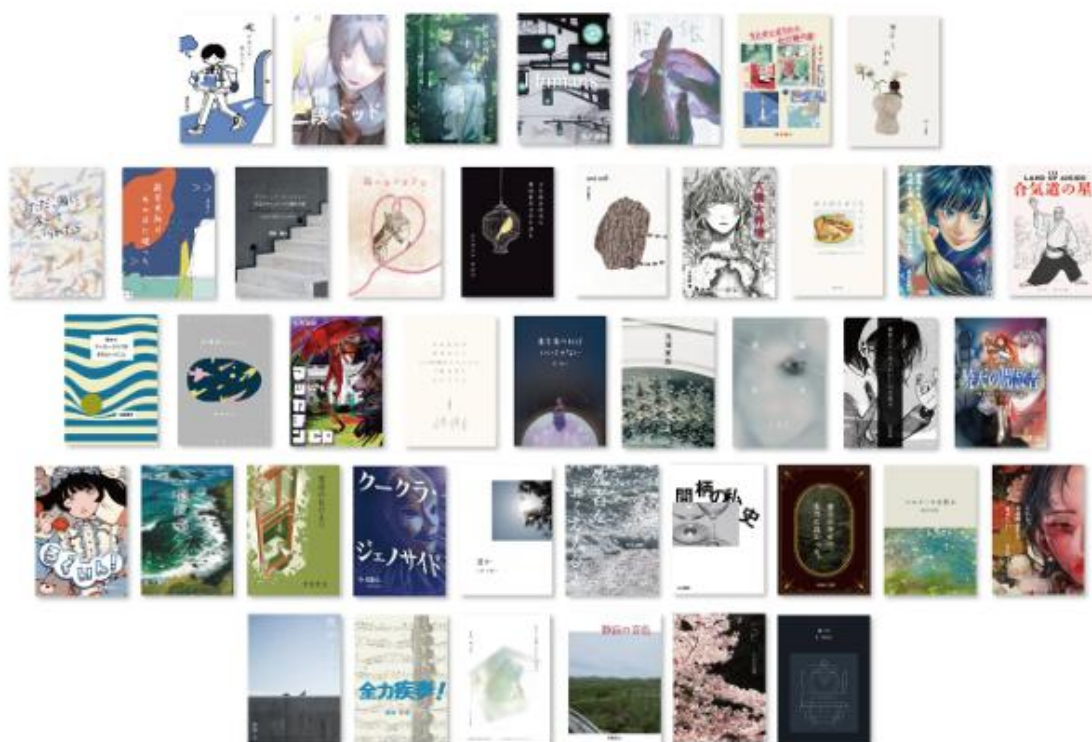
例年、ジャンルの異なる 40 作程度の卒業制作に関しては時間を惜しまずにかけて審査・審議している。まず全専任教員を 2 班に分け、チームごとに最終審査対象作を決定。最終審査作は全専任教員で討議し、ジャンルごとの偏りも是正しながら受賞作を決定している。成績に関してはルーブリック評価を活用、学生に納得感のある評価を示している。

実際の例として、2023年度の卒業制作の学長賞受賞作品は、上村裕香『ほくほくおいも党』であったが、本作はのちに加筆修正が加わり、2025年7月16日に小学館から単行本として刊行された。

また、全作品に対する「卒制講評会」を2日間にわたり開催。全学科の学生参加のもと、一作品あたり20分間、活発に講評がかわされる。こちらはオンラインで同時配信されていて誰でも見ることができる。外部評価者の招聘などは行っていないが、2023年度の卒制講評会には、編集者のオンラインでの参加もあった。

## 卒業展について

本学科では、このようにして作成された文庫本を、他学科とのコラボレーションによって生まれた美しい装幀カバーを装着し、卒業展にて販売する。卒業制作文庫本の「ブックストア」を主たるコンセプトに、卒業展は学生の手によって企画・運営される。



また、以下に文芸表現学科の卒展会場への来場者数の推移を示す。

・文芸卒展の来場者数 2,052 人

23 年度 2,484 人、前年比 83%、23 年度は過去最高

22 年度 2,423 人、21 年度 1,730 人、20 年度 1,481 人、19 年度 1,828 人、  
コロナ禍以前の 18 年度 2,061 人

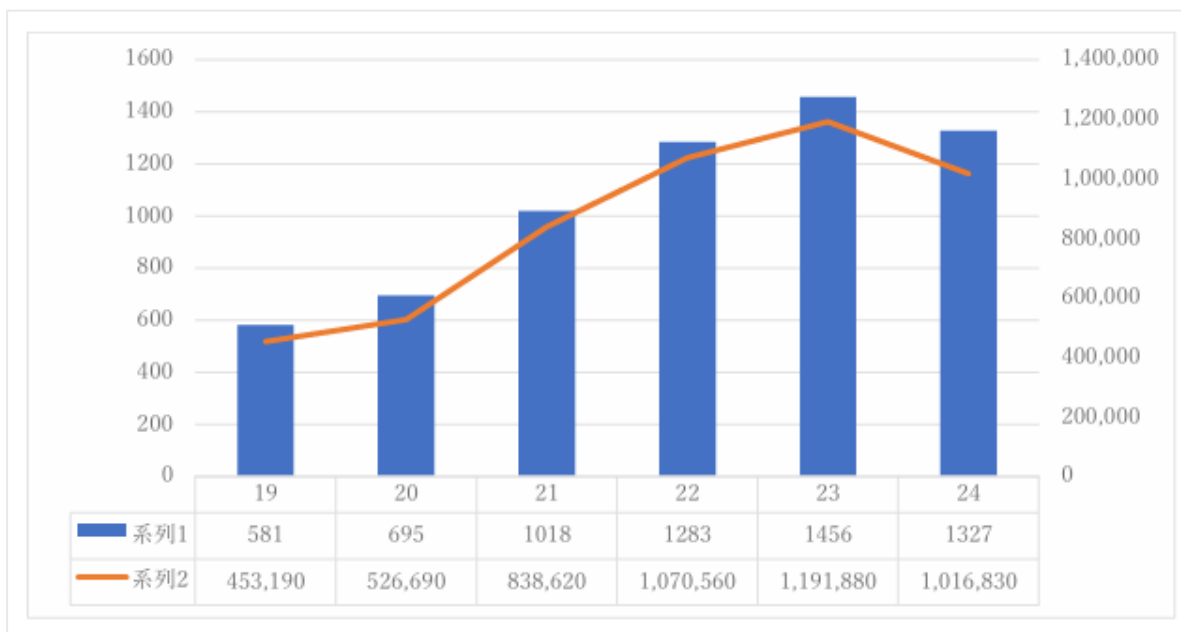


全体の入場者数に対し、文芸への来場者は 11.5 パーセント。

23 年度は 20 パーセント程度

\* どう誘導できるか

つづいて、文庫本の販売数と金額の推移を示す。



これらのデータから、コロナ禍以降はコンスタントに入場者数も文庫本の販売数および金額をのばしていたが、2024 年度には減じたと分析できる。2023 年度からはコロナ禍では中止していたカフェの営業を復活させ、来場者の滞在時間をのばすため、ひいては文庫本を手にとってもらい購買につなげるため、卒展会場を「ブックカフェ」としてデザインしている。

### ③「人材の養成に関する目的」に対する達成状況

学科の「人材の養成に関する目的」に対する達成状況については、直近3ヶ年の卒業生の進路結果をもとに検証するものとするが、その前に基準1-1で述べた学科の「人材の養成に関する目的」は2024年の教育改革で策定された内容であることに留意する必要がある。

これは2024年度入学生以降の教育課程で達成を目指すものであるため、それに照らした進路目標は基準3-2「教育課程」の「⑤キャリア教育」の項で述べたとおり「文芸専門職（目標10%）、文芸専門応用職（目標30%）、文芸専門総合職（目標60%）」であるが、この達成状況があらかになるのは2027年度卒業生以降である。

よって、上述した直近3ヶ年の卒業生の進路結果は、2024年の教育改革より前（2023年度以前の入学生）のカリキュラム・マップとカリキュラム・ツリー、進路パターンなどの各資料に示された「旧・進路目標」と照らす必要があるため、まずは以下にそれを詳述する。

2023年度以前の入学生の文芸表現学科のカリキュラム・マップとカリキュラム・ツリーは本学ウェブサイト・授業科目の構成（～2023年度）で公開されている。また、本学キャリア委員会に提出された文芸表現学科の進路結果総括・進路パターン資料にも、2023年度以前入学生の進路パターンとその目標値が示されている【資料4-1-3】。そこで、それらの資料を参照しながら、2023年度以前入学生の学科進路パターンの目標値を以下に示す。

職種大分類	職種中分類	職種小分類	目標値
文芸直結型 書く・編む	文筆業	作家、ライター、記者、ゲームシナリオライターなど	10%
	編集者	出版社・編集プロダクションなど (書籍編集、雑誌編集、マンガ編集、WEB編集)	
文芸応用型 企画力・物語力・ 文章力・文芸的知識を活かす	書店員/図書館司書	書店員、図書館司書など	25%
	ゲーム/IT/WEB	ゲーム(企画営業・企画制作)、システムエンジニア WEB(企画営業・企画制作)など	
	印刷/広告	印刷(企画営業・ソリューション)、 広告(企画営業・企画制作)、広告(コピーライター)など	
	放送/映画	放送番組制作会社、映画・ドラマ制作会社など	
その他	広報/地域	広報/地域コーディネーター/地域NPO/行政組織など	65%
	一般企業	一般企業、兼業作家など	

直近3ヶ年の卒業生の教育課程は、上の表の進路目標を達成することを目指して遂行されていた。その結果、文芸表現学科で涵養された「書く力」「編む力」「企画する力」「物語をつくる力」「文芸的知識」を活かした文芸直結型職種と文芸応用型職種に進む卒業生が、学年の35%にのぼるかどうか、この達成状況を示すラインとなる。

以上をふまえて、ここからは直近3ヶ年の卒業生の進路結果を述べる。【資料4-1-3】

### 2024 年度卒業生（2025 年 3 月卒）進路結果

- ・卒業生（42 人）の進路決定率は 100%。
- ・うち文芸直結型職種に決定は 4 人（編集者職 1 人、テクニカルライター職 1 人、ゲームシナリオライター 2 人）で、全体の 9.5%（学科目標 10%）。
- ・次に文芸応用型職種に決定は 11 人（広告・印刷、放送・映画・イベントなどクリエイティブ系制作職、書店・図書館、地域行政）おり、全体の 26.1%（学科目標 25%）。
- ・文芸直結型と応用型の合計は 15 人/42 人で、35.7%。（学科目標 35%）。
- ・卒業時アンケートによる進路満足度は 87.1%。

### 2023 年度卒業生（2024 年 3 月卒）進路結果

- ・卒業生（39 名）の進路決定率は 89.7%（35 名）。
- ・うち文芸直結型職種に決定は 3 人（編集者職 1 人、新聞記者 1 人、ゲームシナリオライター 1 人）で、全体の 7.7%。ただし、大学院進学の卒業生 1 人が実際はプロ小説家（上村裕香）として活躍しているため、これを加えると 4 人となり、全体の 10.2%。（学科目標 10%）
- ・次に文芸応用型職種に決定は 7 人（広告・印刷、放送映画、書店・図書館）で、全体の 17.9%。（学科目標 25%）
- ・文芸直結型と応用型の合計は 11 人/39 人で、28.2%。（学科目標 35%）
- ・卒業時アンケートによる進路満足度は 89.3%。

### 2022 年度卒業生（2023 年 3 月卒）進路結果

- ・卒業生（41 人）の進路決定率は 92.7%（38 人）。
- ・うち文芸直結型職種に決定は 6 人（編集者職 2 人、ライター・記者職 4 人）で、全体の 14.6%。（学科目標 10%）
- ・次に文芸応用型職種に決定は 7 人（広告・印刷、放送映画、書店・図書館）で、全体の 17.1%。（学科目標 25%）
- ・文芸直結型と応用型の合計は 13 人/41 人で、31.7%。（学科目標 35%）
- ・卒業時アンケートによる進路満足度は 89.2%。

次に直近 3 ヶ年の文芸直結型と応用型、その合計の達成値の推移を下にまとめてみる。

	2023 年 3 月卒	2024 年 3 月卒	2025 年 3 月卒
進路決定率 (目標 90%)	92.7%	89.7%	100%
文芸直結型 (目標 10%)	14.6%	10.2%	9.5%
文芸応用型 (目標 25%)	17.1%	17.9%	26.1%
直結型 + 応用型 (目標 35%)	31.7%	28.2%	35.7%

まず進路決定率は2023年度（2024年3月）卒生の89.7%のみ学部目標の90%未達となるが、これはわずか0.3%差であり、小数点を四捨五入すると90%となるため、ほぼ目標達成と見なしている。よって、直近3カ年を連続で90%を達成しており、とくに最新の2024年度（2025年3月）卒生が進路決定率100%を達成した。

次に進路の質についてだが、文芸直結型職種の目標10%は3年連続で達成している。なかでも特筆すべきは、2022年に新潮社主催「女による女のためのR-18文学賞」大賞を受賞して小説家デビューした上村裕香のほか、人気ゲーム『あんさんぶるスターズ!』などで知られる難関のゲーム会社・Happy Elements株式会社のゲームシナリオライター（2人）、大手出版社・角川アスキー総合研究所の編集者、四国新聞・新周南新聞の新聞記者（2人）である。小説家、シナリオライター、編集者、新聞記者といった主要な「書く仕事、編む仕事」で顕著な成果を挙げている。

一方、文芸应用型職種については2022年度と2023年度は2年連続で目標値を大きく下回り、課題が残されていたが、最新の2024年度（2025年3月）卒生では26.1%と目標値を達成した。これは進路決定率100%を達成できたこととも無関係ではない。2023年度までの進路指導の課題を整理・分析し、その打開策を打ち出して教職員一同で実行してきた学科教育の成果と言える。

この文芸应用型についても、直近3カ年で東映京都スタジオや、TBS子会社の映画・ドラマ制作会社である株式会社テレパックなど、有名・難関企業に進路決定したものを輩出している。また、「その他」の分類にはなるものの、2024年度（2025年3月）卒生のなかには複数の大手証券会社に内定した者もいた。

最後に直結型と応用型の合計であるが、これも2022年度と2023年度は2年連続で目標値に届かなかったが、最新の2024年度（2025年3月）卒生では35.7%と目標値を達成した。

このことからわかるように、2022年度と2023年度は学科の「人材の養成に関する目的」に対する進路結果の達成状況は満足いくものではなかったが、昨年の2024年度はすべての目標値を達成した。これは目標未達の要因を分析し、その改善策を地道に実行してきた成果である。

なお、2025年度（2026年3月）卒業見込みの現4年生（41人）も、2025年7月31日の時点で、早くも就職決定率84.2%を記録しており、なかでも文芸直結型である出版社の編集者職に内定した者がすでに4人（5社）いる（PHP研究所、コミスマ、JTBパブリッシング、SBクリエイティブ、青幻舎）。出版社の編集者職内定が4人（5社）は、現時点で早くも過去最高の数値であり、最終的には昨年度に匹敵するか、あるいは上回る進路達成度が期待できる。

以上のことから、学科の「人材の養成に関する目的」に対する達成状況は年次を追うごとに向上していることがわかる。これは近年の学科教育の成果を保証するものである。

#### ④学生満足度（進路満足度・総合満足度・推奨意向）

##### 進路満足度について

卒業時に回収する卒業時アンケート【資料 4-1-4】の Q30「決定した進路への満足度をお答えください」によると、自身の進路に満足している学生（「満足」「どちらかといえば満足」を選択した学生）の割合は、過去5年で次のように推移している。

	2020	2021	2022	2023	2024
文芸表現学科	67.9 %	69.4 %	65.8 %	75.0 %	84.6 %
学部全体	82.3 %	81.4 %	64.4 %	86.0 %	84.8 %
学科早期内定率	52.9 %	39.5 %	73.3 %	81.1 %	85.4 %

全学的に本項目への無回答が多かった 2023 年度を除外して考えると（本学科では 26.3%、全学では 27.8%が無回答。アンケートの設定に起因する問題と考えられる）、この5年間で漸次的な改善がみられ、2024 年度には全学の水準に達したと考えられる。また進路決定までのプロセス（Q.28「卒業後の進路を検討・決定する活動のプロセスや結果について、あなたはどの程度満足していますか」）についても、2020 年度の 57.1%から 2024 年度の 82.1%まで大きな改善がみられる。その背景としては、表に示すとおり早期内定率（9 月末時点での就職希望者に占める内定者の割合）を記したが、2020～2021 年度の 40～50%に低水準から、社会全体での就職決定早期化の流れに乗り、順調に就職活動を進める学生が大幅に増加したことが考えられる。

##### 総合満足度および推奨意向について

2022 年度より卒業時アンケートに加わった「学科の教育内容に対する満足度（Q.21「所属学科の教育内容に満足していますか」）翌 2023 年度より追加された総合満足度（Q.25「大学生活は総合的に満足していますか」）、そして推奨意向（Q.26「あなたの後輩の方が進学先を検討していたら、あなたは本学を薦めますか」）について、過去の集計結果【資料 4-1-5】は以下である。

		2020	2021	2022	2023	2024
教育	文芸表現学科	—	—	94.7%	97.2 %	76.9 %
	学部全体	—	—	89.1 %	88.0 %	87.2 %
総合満足度	文芸表現学科	—	—	—	97.2 %	79.5 %
	学部全体	—	—	—	92.7 %	91.4 %
推奨以降	文芸表現学科	46.4 %	52.8 %	57.9 %	63.9 %	43.6 %
	学部全体	50.9 %	55.6 %	59.0 %	59.1 %	55.1 %

これら3つの指標は違いに連動しているため、総合的なデータである推奨意向について検討すると、2020年度は学部平均より若干低めであったが、2023年度にかけて学部の水準まで引きあげられたことがうかがわれる。その一方で2024年度は総合満足度、教育満足度も含め、前年度を大幅に下回る低水準にあり、これが単年度かぎりのものであるかどうかは、今後の観察・検討が必要であり、状況に応じて対策を講じる。

### (3) 4-1の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

基準項目4-1においては、やはり「人材の養成に関する目的」に対する達成状況について、現状に満足せず、引き続き進路決定率の高値での安定維持に加え、「進路の質」と「進路満足度」の向上を目指していく。

とくに作家（小説家、脚本家）、ライター（正規含む）、編集者といった学科専門の「書く仕事・編む仕事」については毎年10%以上の輩出が続くよう、これまで述べてきた学科キャリア教育を拡充していく。なかでも正規のライター職は、近年、出版業界や広告業界のみならず、一般企業の広報担当としても求人が増えており、これはある意味で、文芸の学びが実学的なニーズに呼応してきたとも考えられる。今後、「書くこと」が実学的な意味合いをもってキャリアの創出につながっていくのであれば、それは文芸表現が発展するチャンスでもある。そういった近未来も見据えて、広義のライター職を多く輩出していきたい。

また、戯曲・脚本（シナリオ）の学びの出口として、すぐれたフリーランスの脚本家や劇作家、ゲームシナリオライターを輩出することはもちろん、それに加えて放送・映画・演劇といった芸能・エンタメ産業の各種制作会社で活躍する正規雇用としての「優秀なストーリーメーカー」をますます輩出していくことも今後の目標である。2024年度卒業生からはTBS子会社の映画・ドラマ制作会社・テレパックに入社した者がいるが、このような業界大手の制作会社に進む者を増やし、文芸専門職と応用職の合計が40%を超えることを目指して、学科キャリア教育だけでなく、学外の関連企業とも新たな連携を構築していく所存である。

#### 基準項目4-1 エビデンス資料一覧

【資料4-1-1】2024\_後期4クォーター\_進級研究・制作1\_シラバス

【資料4-1-2】1年次ポートフォリオ課題要項

【資料4-1-3】文芸表現学科進路パターン目標

【資料4-1-4】卒業時アンケート「進路満足度」集計結果

【資料4-1-5】卒業時アンケート「教育・総合満足度・推奨意向」集計結果

## 基準項目 4-2 卒業後

- ①卒業生の活躍（社会の変革を牽引する人材）
- ②社会からの評価

### （1）4-2 の自己判定

基準項目 4-2 を満たしている。

### （2）4-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①卒業生の活躍（社会の変革を牽引する人材）

文芸表現学科での学びを活かして社会で活躍している人材（社会の変革を家人する人材）としては、基準項目 4-1「在学中～卒業時」の「③人材の養成に関する目的に対する達成状況」のなかで述べた、文芸直結型職種（作家、ライター、編集者など）で顕著な活躍をしている卒業生について述べる。

文芸関連・クリエイティブ職で活躍中の卒業生リスト【資料 4-2-1】を参照すると、小説家、詩人、歌人、シナリオライターなどとして、社会的かつ継続的に活動している卒業生、あるいは著書を出版するなど、それに準ずる実績を有している卒業生は、学科創設以来 17 人にもものぼる。その他、編集者や新聞記者として活躍している者も多くおり、2026 年 3 月卒見込みの現 4 年生からも、8 月末現在で出版社の編集者職に進路決定している者が 4 人いる。

また、近年では文芸表現学科カリキュラムにおける領域拡大の結果、出版・新聞といった活字メディアだけでなく、広告・放送・映画・ゲームといった、活字・音声・映像・web といったマルチメディアにおけるクリエイティブ職に進む卒業生も増えている。

#### ②社会からの評価

そのなかでも、とくに社会から高い評価を得ている代表的な卒業生の例として、まずは 2023 年度卒で小説家の上村裕香（2022 年、新潮社「女による女のための R18 文学賞」大賞）と、2016 年度卒で小説家の駒田隼也（2025 年、講談社「群像新人文学賞」受賞、同年芥川賞候補）の 2 人について触れたい。上村裕香は一般小説（エンターテインメント小説、大衆小説）、駒田隼也は純文学の分野で、業界内外から大きな注目を集めている若手小説家である。

上村裕香の初単著『救われてんじゃねえよ』（新潮社刊）は 2025 年 7 月時点ですでに 3 刷とヒットしており、7 月 16 日に発売されたばかりの 2 作目の単著『ほくほくおいも党』（小学館）も発売前から話題沸騰であった。これについてはインターネットで「上村裕香」の名前を検索するだけで膨大なニュース記事がヒットするため、ぜひ確認されたい。

一方、駒田隼也については、2025年5月に講談社の群像新人文学賞を受賞した小説『鳥の夢の場合』がいきなり同年の芥川賞候補にノミネートされるなど大きな話題を呼んだ。同作を収録した初単著も7月16日に講談社から発売され、純文学シーンを盛り上げている。

その他、社会からの大きな受賞歴のある書き手としては、上記リストにもあるように、2022年に小説『美しい夜』で「魔法のiらんど大賞2022」小説大賞<文芸総合部門>特別賞を受賞した2015年度卒・中山史花、2021年にHJ文庫大賞（ホビージャパン）をライトノベル『最強英雄と無表情カワイイ暗殺者のラブラブ新婚生活』で受賞した2017年度卒・アレセア、2019年に『熊本くんの本棚』で第4回カクヨムWeb小説文芸部門大賞に輝いた2010年度卒・キタハラ。同じく2019年に短歌で第1回笹井宏之賞・文月悠光賞を受賞した2016年度卒・井村拓哉、2012年に現代詩の年間新人賞「ユリイカの新人」に選出され、2015年には詩集『からだにやさしい』（青磁社）で第21回中原中也賞の最終候補となった2010年度卒・宿久理花子などが挙げられる。いずれも小説家・詩人・歌人として将来有望な若手として社会から高く評価されており、今後の活躍が期待される。

一方、編集者として活躍する卒業生としては、上記リストの2022年度卒・田原瞬（角川アスキー総合研究所）、2017年度卒・横山優佳（银杏社・講談社ヤングマガジン編集部出向）、2015年度卒・植田真衣（KADOKAWA）の3人が代表的である。

また、2015年度卒のフリーライター・大迫知信は、2022年に初の単著『おばあめし』（清流出版）を刊行。NHK「サラメシ」などのテレビ番組にも取り上げられ、話題を集めた。

最後に変わり種ではあるが、国際的な活躍を見せる卒業生として、イラストレーター・装画家の白咲まぐる（2021年3月卒）について触れておく。KANARIAや香椎モイミといった人気ボカロPによるMVイラストが大きな話題を呼び、2023年には徳間書店「ペンタブレット de アート」でグランプリを獲得。翌2024年には中国・上海にて開催されたVISIONS2025

『INTERNATIONAL ILLUSTRATION FESTIVAL』で作品を展示され、2025年には国内外の新鋭イラストレーター170名が選出される『VISIONS 2025 ILLUSTRATORS BOOK』

（KADOKAWA）にも掲載。現在ではオリジナルグッズも発売されるなど、広義のアート・表現の分野で世界的に活躍し、国内外の社会において高い評価を受けている。

### (3) 4-2 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

ここまでは社会での活躍が著しい卒業生について個別具体的に取り上げてきたが、直近の2023年に実施した卒業生アンケートの結果【資料4-2-2】を見ると、今後の課題も浮き彫りになってくる。2017年～2023年までの卒業生を対象とした同アンケートでは、回答数が34人と少ないものの、「大学で学んだ専門と、現在の仕事での業務内容は合致しているか？」という設問に対して「合致している」「やや合致している」と回答したのは32%であった。残る68%の卒業生は、文芸表現とはかかわりがない仕事に従事していると認識しており、その実態は不明であるものの、認識の部分については考えさせられる。文芸表現の学び、つまり「ことばの力」とは本来であれば、どんな仕事にも汎用されるものであるはずだが、本人がそれを認識していないということは、本学科での学びが実社会で効力を発揮していないと考えていることになる。

また、上述の卒業生アンケートの「Q7. “7つの力”のうち、在学中に身についたと思うものは？」という問いに対して「思考力」と回答した卒業生が7割近くおり、その一方で「Q8. 実社会においては、どの“力”が求められていると思いますか？」の設問に対しては「行動力」「コミュニケーション力」と回答した卒業生が7割前後いることにも注目したい。

ここから考えられるのは、卒業生は文芸表現学科で思考力を涵養できたものの、行動力とコミュニケーション力についてはあまり身につかなかったため、だからこそ、「大学で学んだ専門と、現在の仕事での業務内容は合致しているか？」という設問に対して「合致している」「やや合致している」と回答した人が少なかったのではないか、ということである。社会での実際の仕事には行動力とコミュニケーション力が不可欠なため、それらを求められる仕事に従事している結果、学科で涵養された思考力が活用できていないように感じているのかもしれない。

しかし、2024年度入学生からの新カリキュラムでは、ここまで述べてきたとおり、「読む、書く、編む」だけでなく「聞く、話す」ということにも力を入れ、コミュニケーション力の涵養にも取り組む計画を立てている。そのために必要な社会実装科目や、他者との協働も含めて文芸表現の基礎許容を多角的に学ぶ文芸表現シリーズ、そこから発展する段階的なキャリア教育を着々と遂行していくことが、この課題を改善できる向上方策となることはまちがいない。

#### 基準項目 4-2 エビデンス資料一覧

【資料4-2-1】文芸関連職・クリエイティブ職で活躍する卒業生一覧

【資料4-2-2】2023年度\_卒業生アンケート集計結果（文芸表現学科）

## 基準 5 内部質保証

### 本基準の趣旨

大学は、自らの責任で自大学の諸活動について点検・評価を行い、その結果と認証評価などの外部質保証の結果をもとにした継続的な改善活動を行うことにより、教育研究及び中期的な計画を踏まえた大学運営全般の質を保証しなければなりません。自主性・自律性を重視する大学の本質に照らし、大学の質保証は、基本的に大学の責任で行うことが求められており、認証評価における重点評価項目として位置付けられています。

内部質保証を効果的に実施するため、本学では内部質保証ポリシーとして「内部質保証方針」<sup>5</sup>と「内部質保証システム図」<sup>6</sup>を定め、恒常的な組織体制を整備するとともに、その責任体制を明確にしています。

学科別カリキュラム評価においては、とくに授業科目レベルでの内部質保証に焦点をあて、それが大学全体の内部質保証と連動し、改善につながる仕組みとして機能しているかどうかを点検・評価します。授業科目レベルの内部質保証については、内部質保証方針に次のとおり定めています。

#### (5) 授業科目レベルの内部質保証推進「学科会議」「研究科委員会」

授業科目レベルの内部質保証の推進については、学部の各学科、芸術教養センター、芸術教育資格支援センター（以下、「学科等」という。）及び研究科がこれを担う。学科会議、芸術教養センター会議、芸術教育資格支援センター会議（以下、「学科会議」という。）又は研究科委員会において毎年度自己点検・評価を行い、教育推進会議に報告する。その結果は、教育推進会議を経て学長会及び自己点検・評価委員会へ報告される。学長会は結果を受けた改善指示を、教育推進会議を経て、学科等及び研究科へフィードバックする。各学科等及び研究科は改善計画を策定し、次年度「教育計画」として教育推進会議に上程する。教育推進会議は、各学科等及び研究科との面談を経て教育計画を承認し、学部及び研究科の次年度教育計画として学長会及び自己点検・評価委員会へ上程する。学長会は教育推進会議の審議を受け、次年度教育計画を決定する。

5 「内部質保証方針」 [https://www.kyoto-art.ac.jp/info/policy/pdf/Internalquality\\_policy.pdf](https://www.kyoto-art.ac.jp/info/policy/pdf/Internalquality_policy.pdf)

6 「内部質保証システム図」 [https://www.kyoto-art.ac.jp/info/policy/pdf/Internalquality\\_map.pdf](https://www.kyoto-art.ac.jp/info/policy/pdf/Internalquality_map.pdf)

## 基準項目 5-1 内部質保証の機能性

- ①学修成果の把握・分析、結果の活用
- ②学生の意見・要望の把握・分析、結果の活用
- ③内部質保証のための PDCA サイクルの機能性

### (1) 5-1 の自己判定

基準項目 5-1 を満たしている。

### (2) 5-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

#### ①学修成果の把握・分析、結果の活用

2024 年度入学の新カリキュラム生から、進級にあたっての要件に次のような GPA 基準が設定された。2 年次への進級に際しては GPA（通算）1.3 以上、3 年次への進級に際しては 1.4 以上、4 年次への進級に際しては 1.5 以上。2023 年度以前入学の旧カリキュラム生の、進級時点での離籍率については、例年 2 名以下で推移しており、学部目標（離籍率 4%以下）を堅持していたが、GPA 要件の導入により、個々の学生に対してこれまで以上に細やかに対応し、学生自身の学修 PDCA サイクルを確立させていくことが重要と考えられた。

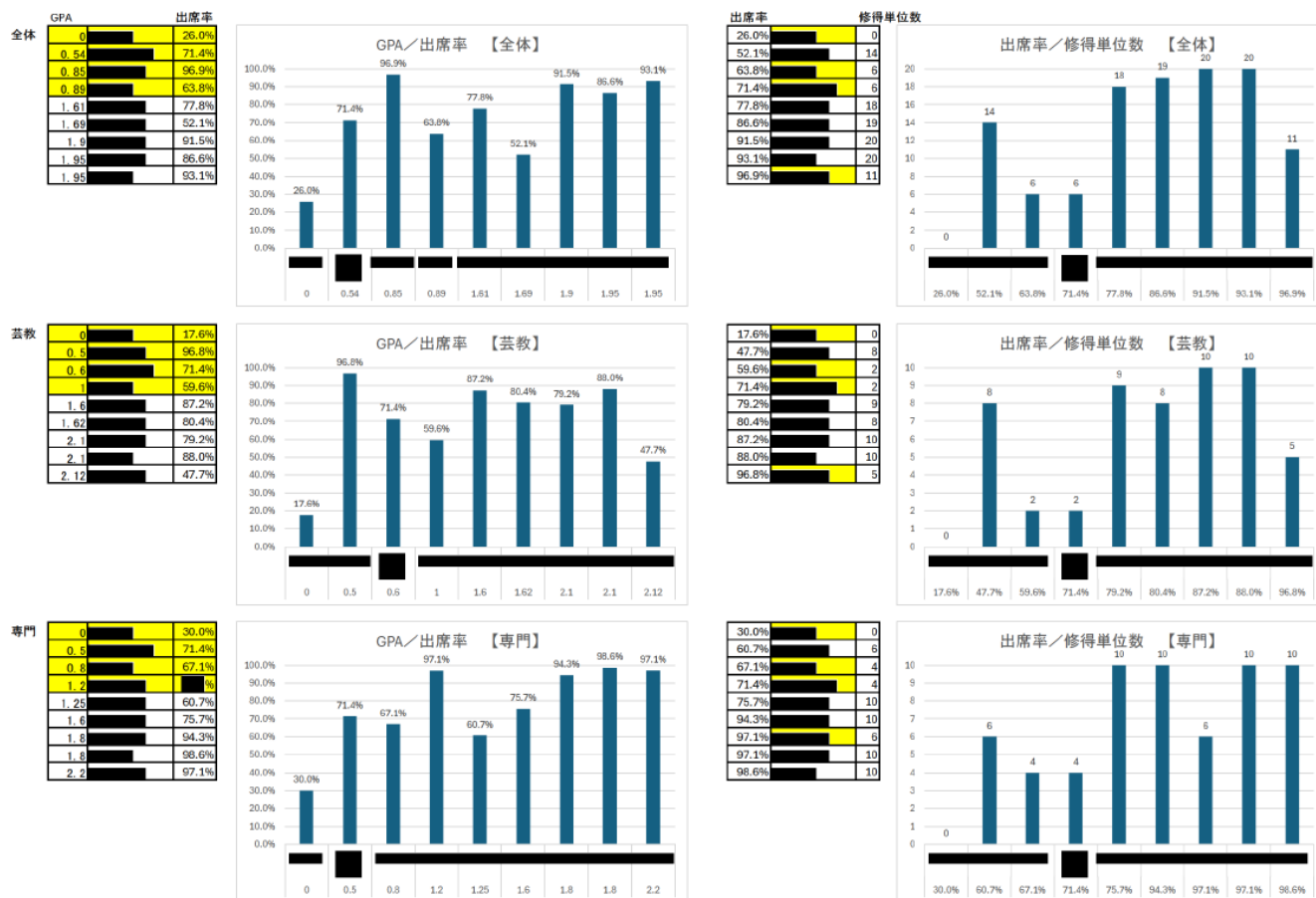
それをふまえて 2024 年度においては、学部目標であった 2 年次への進級率 93%を達成することができなかった（学科進級率 91.3%）。そこで、出席率と GPA の相関関係を分析し、どのような学生に重点的に対応する必要があるのかを見極めることにした。具体的には、進級要件にかかってきそうな層として、GPA（芸教+専門）2.0 未満の学生を分析した。この層は、1.0 以下のクラスターと 1.5~2.0 のクラスターとに明確に分かれていた。【資料 5-1-1】

まず、GPA1.0 以下のクラスターでは、出席率が 7 割を超えているにもかかわらず、GPA が 1.0 を下回っている学生が複数いることがわかった。学修について個別の問題（学修能力や課題提出などの手続きについての理解など）を抱えている可能性があると考えられる。

一方、GPA1.5~2.0 のクラスターにおいては、出席率が 8 割を超えている学生は単位を落とすことは少ないものの、心身の不調やなんらかの原因で学修意欲を喪失してしまい欠席が増えるようになると途端に進級困難の予備軍になる可能性が見受けられた。

こうした分析をもとに、2 週連続で欠席した学生に加えて、2 課題連続で未提出や課題の達成度に問題のある学生に対して、授業担当教員が速やかな声掛けや面談などによって指導することとした。さらに、そうした学生の状況を月に 2 度開かれる学科会議などで共有し、ケアが必要な学生には複数の授業間で連携して対応することで進級困難に陥らないよう取り組むこととした。

以下、補足資料として、2024年度の「GPA・出席率・修得単位数の相関（墨消し済み）」を貼付する。



図：2024年度「GPA・出席率・修得単位数の相関」

## ②学生の意見・要望の把握・分析、結果の活用

本学科では定期的に学生へのアンケート調査を行なっている。アンケートによる学生からの意見・要望を学科内で共有し、教育研究や学生支援、学科運営の改善・向上に反映している。アンケートには「授業改善アンケート」「学生生活・学習アンケート」「卒業時アンケート」がある。

授業改善アンケートは、全授業の最終回に、10分ほどの回答時間を設けて実施している。「授業は分かりやすくなるような工夫や配慮があった」「私はこの授業の到達目標を達成することができた」など、9個の設問に対して4段階の選択肢からひとつを選ぶというもので、フリーコメント欄に感想を書くこともできる。最終回を欠席した学生にも個別で連絡をして、なるべく全員に回答してもらい、その結果を学科内で共有したうえで、非常勤も含む教員全員が半期ごと

にリフレクション・ノートに、担当した授業全体のふりかえりや継続していききたいことや改善点、改善に向けての具体的な施策などを記入する。

その後については基準項目 3-2⑨でも詳述したが、リフレクション・ノートの内容をもとに、学科内で半期ごとに組織的授業改善活動をおこなっている。会議では、教員全員が、半期に担当した新カリキュラムの授業について工夫したことや課題だと感じたこと、改善点などについてプレゼンをしあい、他の教員の教授法から学べることを取り入れている。また、他の教員の担当する授業内容や教授法を知ることで、教員は自身の担当する授業が他の授業とどのような相関関係にあり、カリキュラム・マップのなかでどのような位置づけにあるのかを具体的に知り、それらの文脈に即した形でブラッシュアップすることが可能となっている。

学生生活・学習アンケートは毎年7月に1～3年生に対しておこなっているもので、全34項目からなり、学習・生活状況の実態や、学習環境・大学施設・学生支援に対する満足度、意見を把握することを目的としている。2024年度は93%の回答率だった。寄せられた意見は学科会議で共有して、在学生の学生生活がより充実したものになるように役立てている。

卒業時アンケートは、毎年1～3月に4年生に対して実施しているもので、入学時から卒業時までの大学生活や学びの質をふりかえってもらい、学科の教育活動をより良く発展させることを目的としている。アンケート結果については、進路満足度と後輩への推奨意向の有無を、なかでも重く受け止めている。

改善策としては、複数内定の推奨、4年次終了間際の駆けこみ内定を減らすこと、などをおこなっている。2024年度卒業生の卒業時アンケートでは、進路満足度75%（満足27人/回答36人）」という結果がでた。ネガティブな回答をした9人のうち3人は、3月末までに決まらなかった未決定学生、別の3人は年明け以降の駆けこみ内定学生だった。したがって、未決定学生を減らすだけでなく、駆けこみ内定学生も減らす、すなわち早期内定率をあげることが、改善につながると考えられる。

早期内定率（10月1日時点での内定率）は3年連続80%以上を達成しているが、早期内定していない学生についても粘り強く指導を続けて、年内での内定獲得をめざしていく。上述のような分析と改善を繰り返してきた結果として、進路満足度は2021年度は69.4%、2022年度は65.8%、2023年度は75%、2024年度は75.6%と、経年的に上昇している。

後輩への推奨意向は、2021年度52.8%、2022年度57.9%、2023年度は63.9%、2024年度は43.6%、と2024年度のみ大幅に減少しているので、大幅な方針は変えないままに、より早期からの就活の指導により複数内定の推奨を徹底していく。

### ③内部質保証のための PDCA サイクルの機能性

文芸表現学科として、教育および学科運営の内部質保証のために実行している PDCA サイクルとしては、まず毎年秋～冬にかけて策定される「次年度教育計画・学科目標」がその Plan にあたる。以下が直近3ヵ年の「次年度教育計画・学科目標」資料である。

2023 年度_教育計画・学科目標（文芸）	2022 年 11 月策定・12 月学部決裁【資料 5-1-2】
2024 年度_教育計画・学科目標（文芸）	2023 年 11 月策定・12 月学部決裁【資料 5-1-3】
2025 年度_教育計画・学科目標（文芸）	2024 年 11 月策定・12 月学部決裁【資料 5-1-4】

上記資料にあるとおり、学科の次年度教育計画と学科目標は、まず前年度の学科の課題点の整理から始まり、次にエビデンスに基づいた論理的な要因分析を受け、最後に Plan にあたる対応施策の立案につながる。文芸表現学科では再三の学科会議や担当教員同士の分科会を繰り返し、学科教職員全員での協働・合議による次年度の Plan を策定する。

その Plan は学部決裁を受け、次年度シラバスの作成時点から実行（Do）に移る。そして、いよいよ4月から次年度が始まり、授業運営、学生支援、学科運営などの各項目ごとに適切に進行していく。その後、また次年度の秋になり、その翌年の「教育計画・学科目標」を策定するにあたり、これまでの実行結果を学科内で点検（Check）し、もし課題点があれば冒頭の要因分析に移り、対応施策の立案（Action⇒Plan）に至る。この一連の繰り返しは、まさに PDCA サイクルが学科組織レベルで機能していることの証左となる。

また、上記に加え、2024 年の5月には前年（2023 年）の教育計画の実行結果を受けてのふりかえりにも着手し、その結果を学科長が報告書にまとめ、学部に提出した【資料 5-1-5】。こういった取り組みも別途おこなうことで、PDCA サイクルをより充実したものとしている。

### (3) 5-1 の改善・向上方策（課題などに対する改善状況と今後の取組み予定）

ここまで述べてきた学科教育や学科運営における「内部質保証」をより機能的にするためには、昨年の5月に学部へ提出した「ふりかえり資料」【資料 5-1-5】にてまとめられた各項目の課題と対策を実質化することが肝要である。

たとえば成績不振者の修学指導面談の結果検証を受けて、1年生の修学指導面談がもっとも今後の学修改善につながるということがわかったため、今後は初年次の成績不振者を重点的に指導していく。また、PROG テストの結果から文芸表現学科の学生は「対人基礎力」に課題を抱えていることがわかったため、授業内でのディスカッション（チームビルディング、ディベート、PBL）をより強化する。次に、4年生の進路満足度の向上を目指して、就職活動で複数内定をとることを推奨し、その中から自分の進路を主体的に選ぶ機会を創出する。

その他、報告書にまとめられているような結果検証と今後の施策を学科内で共有し、それらを組織レベルで着々と実行していく計画である。

#### 基準項目 5-1 エビデンス資料一覧

【資料 5-1-1】2024 年度入学生\_学修成果の把握・分析（25\_教育計画・学科目標より）

【資料 5-1-2】2025\_1\_教育計画・学科目標（文芸）

【資料 5-1-3】2024\_1\_教育計画・学科目標（文芸）

【資料 5-1-4】2023-1-教育計画・学科目標（文芸）

【資料 5-1-5】2023-教育計画・学科目標ふりかえり（文芸表現学科）

## おわりに

今回、本学科の自己点検・評価に取り組んだことで、あらためて文芸表現学科の教育目標や教育課程を確認する機会に恵まれた。本学のカリキュラム・ポリシーに照らし、また他学科の状況にも視野を広げ、本学科の教育課程を相対的に点検できたことは有意義であった。

なかでも、基準項目 1-1 で述べた「時代の変化に対応した文芸表現学科の個性・特色」は、本学科の長所であると認識している。小説の学びにおいて、文芸市場の変化に対応した「書くこと」と「届けること」のマルチマインドの涵養はこれからの時代に必ず有用となり、また、社会における人材需要の拡大に合わせた広義の編集的思考の涵養と、編集者・ライターへの育成は「文章を書く、編む」という行為に実学的な価値を生み出すことにつながる。従来の人文学領域において懸念されがちだった課題点を、文芸表現学科は克服することを目指している。

それに加えて、コンテンツ需要の拡大に合わせた脚本家（シナリオライター）の育成は、文芸表現の学びを出版・新聞・広告業界のものだけに留めず、演劇・放送・映画・ゲームといった多様な芸能・エンターテインメント産業の横断にまで広げている。さらに、本学科ではアナウンサーや落語家の教員による「ことばを話す、聞く」といったカリキュラムも用意されており、従来の人文学領域をますます拡大し、かつ実質化している。

また、それは決してお題目だけでなく、実際に文芸表現学科の近年の卒業生を見ても実質化されてきていることがわかる。上村裕香、駒田隼也など小説家として活躍する者、KADOKAWA などの出版社や編集プロダクションで編集者として活躍する者、新聞記者として活躍する者だけでなく、ゲームシナリオライターとして活躍する者、広告業の制作会社や、放送・映画業の制作会社で活躍する者など、ますます多岐にわたっている。これは学科の体系的なカリキュラム・マップと教職協働によるキャリア支援の賜物であると自負している。とくに 2025 年 3 月卒生の進路決定率 100%と、そのうちの文芸関連職の割合の多さについては胸を張りたい。

しかし、一方基準項目 2-1 で触れた近年の志願者減少問題は、本学科の最大の課題として強い危機感を抱いている。この学生募集状況が改善されない限り、入学初年次の学修状況、果ては数年後の進路決定状況にも悪影響が出ることは必至である。よって、今後は上述した「学科の特色」をより計画的かつ戦略的に学外に発信することを強化し、基準項目 2-1 の最後に述べた向上方策によって状況改善を目指していく。

この学生募集戦略であるが、より具体的には従来の「小説家志望層に向けた体験授業」の計画的な実施だけでなく、「劇作家・脚本家志望層に向けた体験授業」も並行して実施することで打開策を進行中である。こうすることで本学内の映画学科や舞台芸術学科、キャラクターデザイン学科などの「ストーリー創作系学科」と併願する受験生を増やし、学生募集の対象となるマーケットの拡大につなげている。そもそも脚本という領域は、「文章を書く」というその一点の力（行

為)で、映画・放送・演劇・ゲーム・アニメなど多様な業界を横断するものであるため、この路線での学生募集戦略は、現状を打開する突破口になると考えている。

また、今年度から「探求プロセス型入試」という新たな入試方式も本学アドミッション・オフィスの主導で始まり、そこでは上述した小説・脚本層へのリーチではなく、より広範囲に「本が好き」「本屋が好き」「学校の図書室が好き」「国語の授業が好き」などといった、一般大学の文学部志望と重なりそうな層にリーチする戦略を立案・実行している。その他、取材・執筆、ジャーナリズム、ノンフィクションといった分野と親和性が高いであろう、各高校の新聞部やマスコミ研究会などにもリーチする計画も立案している。

こういった戦略的な学生募集活動は、18歳人口の減少が叫ばれる今後の社会においては、私立大学として必ず取り組まなければならないことだと認識している。学科の特色を大きく打ち出し、その魅力を適切なマーケット層に向けて効果的に発信していくことが重要である。

最後になるが、ここまでの膨大な資料に目を通していただいたカリキュラム外部評価委員のみなさまには心より御礼を申し上げたい。文芸表現学科は、まだ設立20年にも満たない若い学科ではあるが、「ことばの力」の可能性を信じて、未来の社会を変革・牽引していける人材を養成すべく、これからも学科の発展に力を注いでいく所存である。

2025年7月  
文芸表現学科  
学科長 山田 隆道